

長沢道寿『藪医問答』の解題と翻刻

本稿は、長沢道寿の著作『藪医問答』の解題と翻刻である。安土桃山時代から江戸時代初期に活躍した長沢道寿の医学に関しては既に少なからぬ言及があり、その著書『医方口訣集』『増補能毒』（刊本）が影印出版されて広く知られているが、『藪医問答』は道寿の著作として著名でありながら未刊に終わり、また従来、影印や翻刻がなされたことがなく、その内容は広く知られてはいない。

『藪医問答』は上下二巻からなり、上下巻の各巻頭に掲げられた序文を除けば、全体は問答体で構成されている。成立年は不明である。刊行されず写本によって流通した。治験例は挙げられていないが、医師をめぐる道寿自身の考え方が詳しくまとめられており、道寿が開設した「藪門」の弟子のために作られた医学入門書と言ってよい内容である。本稿を作成し、広く紹介したいと考えた所以である。

長沢道寿の略伝

道寿はその医者としての通称であり、他に柳菴・丹陽坊・売薬山人とも号した。はじめ土佐で開業して名声を得たので、古河の三喜や甲斐の徳本と同様に国名を冠して「土佐の道寿」と称されたという（『皇国名医伝』²⁾）。

道寿の生年・生地は未詳で、一般には「土佐の人」とされるが、京都に生まれ育ったとも言われる³⁾。その父長沢理慶は阿波の人で、理慶は初め足利氏に仕えて河内国に所領を持っていたが、天正中に浪人して京都に移り医業に従事した。理慶の長男を理成といい、道寿はその次男である。天正十三年（一五八五）、理慶は山内一豊に召し出されて長男理成とともに江州の長浜に移り、慶長六年（一六〇二）に一豊に従って土佐に移り、父子ともにその侍医となった。理慶は土佐藩における最初の医官とされている。慶長十六年（一六一一）に父理慶が死去したのち、道寿はその遺俸二〇〇石を継いだ。稲葉内記の女を娶り、二男（後述する潜軒と太庵）をもうけたが、後に二子を兄理成に預け土佐を去って上京

1) アレッサンドロ・ビアンキ、町 泉寿郎

1) カ・フォスカリ大学東アジア研究科
2) 二松学舎大学東アジア学術総合研究所

した。一時、織田信雄に仕えて四〇〇石を賜ったが、やがてこの勤めも辞した。また土佐藩家老野中直繼(兼山の養父)から招かれて、土佐二代藩主山内忠義の治病に当たったともいうが、長く土佐に留まることはなく、間もなく京都に戻り、御室仁和寺近くの双ヶ岡に住み、医学を講じた^④。双ヶ岡「藪門」に学んだ中山三柳の『増補医方口訣集』序にも道寿の略伝が見える^⑤。

道寿は医学を曲直瀬玄朔(一五四九〜一六三一)に学び、同時に吉田宗恂(一五五八〜一六一〇)の下でも運氣論を学んだといわれ、『藪医問答』にも「先師意庵」という表現が見える。また「是先君子理慶翁師としつかへし一溪老人」(十四才)とあることから、道寿の父理慶が曲直瀬道三(一五〇七〜一五九四)に医学を学んでいることがわかり、父子二代にわたって曲直瀬流医学を学んだことが知られる。

浅田宗伯『皇国名医伝』(一八五二刊)の伝える逸話によれば、古林見宜と親交があり、道寿が寛永十四年(一六三七)に亡くなる際には見宜が大坂から来診したという。またある時、近所に住む一老医を尋ねて指導を受けたいと願いだしたが、老医は辞退してぼろぼろになった『万病回春』を示しつつ、特に教えるほどの内容は無いと道寿の入門を受け入れなかった。道寿は恥じて以後一層、医学に専念したという。道寿の没後も、その子孫が長く医業を継承したため、土佐の道寿の名は幕末にいたるまで人口に膾炙したらしく、『皇国名医伝』には「大坂堺市の薬舗、今に至るまで薬の良なるものを称して土佐用と云ふ」(原漢文)という話が記録されている。

道寿の男、潜軒(一六二二〜一六七六、名は虎、通称は文蔵・少貳)は、『土佐人物伝』(一八九七刊)によれば、稲葉内記の女を母として、

元和七年に高知城下に生まれた。既述したように、父道寿が土佐を去った後は、叔父理成に最初の教育を受け、次いで小倉三省と野中兼山の下に儒学を学び、天文曆算にも達した。壮年期には江戸で活動し、土佐の南学を江戸に伝えた人物として知られる。一時、播磨国の浅野長友に仕えたが、辞職して父道寿が隠棲した京都小室村(御室)に住み、二代道寿を名乗って医業を継いだ。その男柳杏(一六五五〜一七五二、名は元喬、諡は有三)、その孫元藤(一七〇一〜一七七三、字は道卿、号は鶴阜・潜鱗)も医業を継いだ^⑥。一説に、潜軒の弟太庵が三代道寿を継承したとも言われる(『土佐人物伝』)。

『藪医問答』の成立と伝承

現在、『藪医問答』の伝本は四種類あるが、慶應義塾大学富士川文庫にある写本をのぞけば、他の伝本は長沢道寿の別の著作と合冊されており、各本は異なる構成を持っている。次に各本について紹介する。

・慶應大学富士川文庫本 請求記号四九〇・九ㄨa-1

[以下^⑦と略す]

全一冊 四八丁。每半丁二一行。各行の字数は不定。

調査した四本のうち最古の写本であり、本文は『藪医問答』のみからなっている。奥書によると、その成立年は元禄七年(一六九四)であり、下巻本文末に外の伝本にはない「長沢道寿記焉／元禄七甲戌年九吉辰」の奥書がある。

・京都大学富士川文庫本 請求記号ヤ／七九

〔以下㊸と略す〕

全一冊 全八五丁。『藪医問答』の部分は毎半丁一〇行、『治例問答』の部分は毎半丁二行。ともに各行の字数は不定。

本稿の底本とした写本である。『藪医問答』（一オ〜五十九ウ）と『治例問答』（六十オ〜八十五ウ）から構成されている。両編の後に跋文があり、巻末に「宝暦四年甲戌初秋佐伯繪素堂亨也」の奥書が見られる。字体等から判断して、『治例問答』と『藪医問答』は同じ書写者によって書かれたかと推定されるので、宝暦四年（一七五四）頃に全体が書写されていると見られる。かつ『治例問答』の跋文に「万治改元冬十月望震軒書之」と見られることから、『治例問答』のほうは「望震軒」という人物が万治元年（一六五八）に書写した写本によって宝暦中に筆写したことがわかる。したがって『藪医問答』のほうも、同様な正本によって同じような頃に作成された可能性が高いと考えられる。本写本自体は江戸中期の末（宝暦四年、一七五四）の成立であるものの、最古の正本（万治元年）をもとに筆写したものと考えられ、かつ誤字や鎖簡、脱文なども比較的に少ない。

・杏雨書屋乾々斎文庫本 請求記号 乾二六二二

〔以下㊸と略す〕

第一冊 全五六丁、第二冊 全四六丁。第一冊の部分は毎半丁一行、第二冊の部分は毎半丁九行。共に各行の字数は不定。

諸本のうち一番複雑な構成を持っている本であり、『藪門家医術学習』（第一冊、一オ〜四オ）、『藪医問答』（第一冊、五オ〜五十六オ）、且つ無題の著作「寛永十一（一六三四）年成立」（第二冊、一オ〜四十六オ）から成る。『藪門家医術学習』の巻頭に「土佐道寿撰」と書いてあるが、『藪医問答』の部分には識語等は記されていない。成立年は一切書かれていない。

・杏雨書屋乾々斎文庫本 請求記号 乾三四二

〔以下㊸と略す〕

全一冊 四一丁。毎半丁一〇行。各行の字数は不定。

杏雨書屋の本と同様に『藪門家医術学習』（一オ〜三ウ）と『藪医問答』（四オ〜四十一ウ）から構成され、前者の巻頭のところに「土佐道寿撰」とある。奥書には次のようにあって、元禄七年（一六九四）写本によって天保十四年（一八四三）に鄭雅高という人物によって筆者された写本と考えられる。

元禄七年甲戌十一月十九日写之終

天保十四年癸卯夏月写也 鄭雅高

既述したとおり、潜軒は延宝四年（一六七六）、柳杏は宝暦四年（一七五二）、元藤は安永二年（一七七三）に没している。したがって、㊸の『治例問答』と『藪医問答』の正本が万治元年に作成されたとすれば、潜軒の門下生によって書かれた可能性が考えられる。同じく、元禄七年に筆写された㊸（転写本）と㊸の正本は柳杏の門下で作成され、宝暦四

年に筆写された㊦(転写本)は、元藤の門下で作成されたものかと推定される。

道寿の著作のうち、刊行されたのは『医方口訣集』や『増補能毒』のみであり、『藪医問答』をはじめとするその他の著作は写本の形で伝えられた。道寿が活躍した江戸初期の医学界では、「口伝」による医学の授受が流布した時代であったとされ、師の講説を聴いた弟子による書留めが後に書物になる場合も多かったにちがいない。ただし、『藪医問答』を、その一例として挙げることはできないと考えられる。

上巻の序文には確かに、橘常実という人物が道寿を訪ね、そこで行った問答の内容を書留めたものであることが記されている。しかし、それが事実であるか否かに関しては疑念がある。本書は問答形式で整理されているが、その用語は当時の口語体と異なり、かなり古めかしい文語体が使われている。また固有名詞や書名が、例えば「素問」の代わりに「素」、「華佗」の代わりに「華」などのようにしばしば省略形で使用されている。これらの点から考えて、実際の問答が行われたとしても、それが本書にとりて成立するまでに、事後の改作が行われたと想定される。

編著者に係わる記載についても、伝存する全ての写本において、問答が行われた際の筆記者の存在を示すような記載は見られない。むしろ㊦の文末には「長沢道寿記焉」とあり、続いて「予、不文字患筆なれば、正本よみわけかたくして、正本の字なりににせ、よう／＼うつしぬ。後見そしり給ふ事なかれ。」とあって、ここに言う正本は道寿の自筆、もしくはそれからの転写本であった可能性があり、原本が道寿によって書かれた可能性が高いと考えられる。

本書の成立年については未詳であるが、底本の跋文に「洛西並ひの岡

の山人土佐の道寿の著す所也」とあり、『藪医問答』の本文中にも「今年より卜居偷閑(三十三ウ)と見えて、『藪医問答』の成立が道寿の双ヶ岡に隠棲した年のものであることを窺わせる。なお「我は産業として奉禄さへはみぬれば」と見えるところから、双ヶ岡に隠棲後もなお藩の禄を給されていた可能性がある。

上記四種の伝本を比較すると、諸本の中には本文の誤字脱字や字詰行詰・用字・仮名遣いなど相違する点は認められるものの、著しい異同は存在せず、本文としてはいずれも類似している。したがって、現存する『藪医問答』の写本は、さまざまに伝写を経てはいるが、内容からすると一括して扱うことが可能である。道寿自身にせよ、門下の一人であるにせよ、まとまった文章になっていた一種類の原本があったと考えることができる。

諸本間の関係は必ずしも明らかではないが、㊦と㊧には、『藪門家医学学習』という著作を含んでいる点と次のような内容の相似点があり、共通点が見られる。

医学学習への正道 —— 大・小階梯の内容 ——

『藪医問答』は、以上述べたようにその写本された年代の検討によって、寛永頃から天保頃にいたる約二〇〇年もの長期に亘って読みつがれた著作であり、これを通して長沢道寿の医学が長年にわたって流布したものであったことがわかる。道寿は、『医方口訣集』『増補能毒』によって調薬や治験例に関する著作を残しただけでなく、『藪医問答』によって医学の入門書も著した。道寿の医学教育者としての意識は、次の『藪

『門家医術学習』の一文からも読み取ることができる。

諸技百工の輩といへど師の伝をうけ学習成て後其道は行ふにこそあなれ。近世の医工はいかなれば、学習することなく、方書のまゝに人の病を治すらん。抑百工の類は仮令まなひす技藝つたなくとも害をなすまての事はあらし。医術あやまりぬれば、人の天年を奪ひ憂苦をあたふる事なれり。心あるものは是をうけさらんや。

(一丁オ)

ここで道寿は、不備な教育を受けた医師たちの存在を指摘し、医学を志す弟子たちの道義心を喚起しつつ、師伝によることの重要性を表明している。

『藪医問答』は、やや古めかしい文体が使われてはいるが、大方の医学書と違って専門家でない人にとっても読みやすい漢字平仮名交じり文を用い、時には隠喩や逸話を使用して(十四ウ、十五オ、十七ウ、十八オ、三十五オなど)、中国医学の基礎的な知識を全般的に平易な文章で分かりやすく説明している。

表現は平易であるものの、『藪医問答』に含まれた知識は決して浅薄なものではない。特に、道寿が重きを置いていたのは、いわゆる「学習の次第」である。志を正すところから始まり(三オ)、「学習の次第」を説いている。跋文でも、「医学大小の序」(学習の次第)は、医師を正しく施すための基礎を築くに過ぎないが、医学の大成にはこの基礎こそが重要なのであると指摘している。^⑧

医学の小学・大学を設けたのは、儒学における「小学」「大学」をモ

デルとしたものであり、『藪医問答』には小学(七科)と大学(八科)の次第が一条ずつ列挙されている。その「七科」と「八科」の次第は、左記の通りである。

■小学の七科

- 第一 薬品の気味陰陽功能の理を究る事、三百餘種。
- 第二 方の製法并に古方の本指を弁する事、三百餘許。
- 第三 治病の大法を諳する事、凡五十門。
- 第四 古医按に参する事、凡五百条。
- 第五 診法のこと。
- 第六 針灸穴法経絡をわかち、治理をたす事、凡百餘所。
- 第七 前の第六条を学する餘力に講説をきくへき書十部許。

■大学の八科

- 第一 經十二奇八穴法始終諸経主病治法鍼灸薬
- 第二 榮衛循行度数主病治法鍼灸薬
- 第三 筋骨皮部血絡分肉九竅分寸所主病治法鍼灸薬
- 第四 蔵府形象所主所属治法鍼灸薬
- 第五 氣運常気変気病機治法鍼灸薬
- 第六 望聞問切
- 第七 生死決
- 第八 八風虚邪四時所傷勞倦飲食色欲諸症諸治鍼灸薬

その大・小学習の次第は、『藪医問答』のほかに『藪門家医術学習』

にも記載されている。両書に記す「学習の次第」の内容は、全く同様でありながらも、その次第の順序に若干の異なる点がある。『藪医問答』において定めた学問階梯の順番を、後に著した『藪門家医学学習』において道寿自身が改めたことを示すものであり、学習の過程自体を道寿が重要視していたことが窺える。

ところで、『藪医問答』上下巻は実際のところ、この小学・大学にしたがって構成されている。殊に上巻は、「小学七科」の順序にしたがって、次々に質問され、構成されている。下巻の構成は、必ずしも「大学八科」の順序にしたがっていないが、内容は「大学八科」が中心となっている。それぞれの「問」の内容を要約して左記に示しておこう。

■上巻

・医学書を志す人のための勧め。〈二ウ〉

・学問の次第。〈七オ〉

(小学・第一)

・薬品は凡そ三百種に限ること。〈九オ〉

・薬品の気味、陰陽、功能の究め方。〈十二オ〉

・能毒本草のこと。〈十四オ〉

(小学・第二)

・方の製法と古方をめぐって。〈十四ウ〉

・新方と古方の使用をめぐって。〈十八オ〉

(小学・第三)

・治病の大法のこと。〈二十一オ〉

(小学・第四)

・古医按に関すること。〈二十三オ〉

(小学・第五)

・脉学、診学のこと。〈二十四ウ〉

・脉動によって死生吉凶を決すること。〈二十五オ〉

・五臓六腑の脉をうかがうこと。〈二十六ウ〉

・左寸は心臓、右寸は脾臓に当たる説。〈二十七オ〉

・腎に兩枚の古来の説に關して。〈二十九オ〉

・浮沈遲数の大要、脉經の二十四種に關して。〈三十ウ〉

・死脉が表れると、必ず死に及ぶこと。〈三十一ウ〉

(小学・第六)

・鍼灸の穴処・経絡を分かち、その治験を明らかにする理由。〈三十

二ウ〉

(小学・第七)

・講説十部の次第。〈三十三オ〉(その他)

・薬品・古方・治法・医按・診学・鍼灸の家書。〈三十三ウ〉

・医術は作意によるべし、修学によるべからず。〈三十四オ〉

・大方を見分かち、医術を分かること。〈三十六オ〉

■下巻

・大学のこと。〈四十オ〉

・古学の道。〈四十一オ〉

・扁鵲・華佗・倉公の奇怪な術について。〈三十一オ〉

・倉公の書目のこと。〈四十二ウ〉

- ・老師古学の次第。(四十四オ)
- ・学ぶべき經典の式目。(五十四オ)
- ・張・李・劉・朱は学・庸・語・孟の如し。(五十六ウ)
- ・扁鵲、華佗、倉公が禍にかかったこと。(五十七ウ)

こうした学習の次第を考案するにあたり、道寿の念頭にはどのような先行の著述があったのであろうか。先に安井広迪氏は、吉田宗恂の著述である『古今医案』の影響の下で、道寿が『治例問答』や『藪門医案実録』を編んだと指摘している。『藪医問答』では「小学七科」について説明するにあたり、道寿は「医小学」という著述をあげている。ただ残念ながら吉田宗恂『医小学』は、現在佚書であり、その内容を知ることができない。

「大学八科」については、大倉公の『古医習例』に準拠しているとき^⑧。実際、杏雨書屋の乾々斎文庫^⑨本には左記のように記されている。

右、上達の学習次第なり。詳らかに藪医問答に見る。蓋し、大倉公の古医習例に準擬す。(原漢文)

『藪医問答』には、大倉公が提示した次第に注目した次のような記載がみられる。

一問「師もし古学をなし給は、倉公か書目のことくし給はんや」。

答「史にのする事、文章にしたかつて序する事おほしといへど、倉公か学の次第は誠に如此なるへし。(四十二ウ)」

いずれの「学習の次第」も既存の学説を基盤にしたものであるが、それらを二段階の修学課程として系統立てることに、自分自身の医学概論を作り出した点に、道寿の功績が認められる。

注

- ① 大塚敬節、矢数道明編『近世漢方医学書集成 六三』九一―一八頁、名著出版、東京、一九八二。安井広迪編『近世漢方治験選集 四』五―一六頁、名著出版、東京、一九八五。中島鹿吉編『土佐名医列伝』四―八頁、青楓会、(高知)、一九三五。平尾道雄『土佐医学史考』二四―二七頁、高知市民図書館、高知、一九七七。竹岡友三編『医家人名辞書』二八三―二八四頁、似玉堂、京都、一九三一。
- ② 「其の術大なる世称して土佐道寿といふ。当時名流、田代三喜を古河三喜と称し、永田徳本を甲斐徳本と称するが如く、皆国を以て称す。」(原漢文)
- ③ 『近世漢方医学集成 六三』一一頁(大塚恭男解説)による。
- ④ この段落の記事は、主に『土佐名医列伝』(六頁)による。
- ⑤ 「少くして土州太守に仕へ、壮にして織田内府に事へ、皆辞して洛陽に居り、死を活し癩を起すこと、世の徧く知る所也。後ち仁和寺傍村に隠れ、自ら丹陽坊と号す。予、嘗て洛下に笈を負ひ、彼の坊に就て親炙すること日有り。夫れ先生の医を為むるや、延寿院玄朔印、意安宗洵法眼両家に従へりと。」(増訂医方口訣集)序、元漢文)
- ⑥ この段落の記事は、主に『日本医譜』(国立国会図書館所蔵、写本)による。
- ⑦ 『医方口訣集』も本来門外不出という形で伝わったが、その後上梓され、二回増補されたことが知られている。(『近世漢方医学書集成 六三』九一―一〇頁)
- ⑧ 「これらは(道寿の著書)、道寿の談話や筆録や診療記録などであり、『医方口訣集』を除いて、道寿が自ら書いたものではない。」(『近世漢方治験選集 四』九頁)。
- ⑨ 「侍る」「給ふ」のような断定がよく使用されている。
- ⑩ 「此の二篇を著はし、医学大小の序を立つ。其の説和語を以て膚浅に似たりと雖とも、然れども其の意に通し其の序に本づきて学べば、則ち医学の大成豈に

此に外ならんや」(五九オウウ、原漢文)。

⑪「儒学に大小の次第ある事、そこに心を心得たまふへし。それ儒門小学の道も心の工夫なきにはあらねと、洒・掃・応・対・進・退の法、六藝の事を身に修することなれば、行上によせてをしゆる也。大学の道も、内にしては父兄、外にしては君老、いませは洒・掃・応・対・進・退の法、六藝の事あたちおこなはぬにはあらねと、天命の性理を事々物々に工夫するによつて心上につめてまなふなり。」(七丁ウ)

⑫『近世漢方治験選集 四』一二頁。

⑬「さて医家に大小の学の次第た、しくわきたる事をは、いまた見付侍らす。徐彦純と先師意庵先生宗恂、医小学は只諷誦のたよりをもつはらとし給ふ。」(八丁ウ)

⑭ 本朝医家著述目録には、吉田宗恂が発表した『増補医経小学』(二巻)という書物が存在したが、これも佚書である。(国書総目録による「二七二頁」)

⑮「道寿はさらに大倉公淳于意がその師の公乘陽慶から受けたという黄帝扁鵲脈書上下経、五色診、奇恒、揆、菜論、石神、陰陽外変、接陰陽などの術に則つて、大学八科を設けた。『近世漢方医学書集成 六三』一三―一四頁(大塚恭男解説)

〈翻刻凡例〉

(一) 本翻刻にあたっては、『藪医問答』の四種の写本のうち、京都大学富士川文庫所蔵本を底本とし、慶應義塾大学富士川文庫本^㉓、および杏雨書屋乾々斎文庫所蔵の二本^㉔^㉕を校訂材料に用いた。附録として、杏雨書屋乾々斎文庫本から『藪門家医学習』^㉖末尾に附した。

(二) 漢字の字体に関しては、旧字および異体字(略字、俗字等)は通行の印刷標準字体に改めた。但し、芸と藝、知と智などのような別字は原本のままに残し、余と餘は原本にかかわらず意味所上の区別によつて改めた。

(三) 「より」「こと」「して」等を示す合字等は、平仮名に改めて表記した。

(四) 原文は、平仮名と片仮名を混用しているが、翻刻では平仮名に統一した。但し、漢文の添仮名と漢字の傍訓については片仮名を用いた。

(五) 踊り字(くの字点、一の字点、同の字点)は、原本のまま残した。但し、二の字点は「々」に改めた。

(六) 原本に句読点は施されていないが、翻刻にあたって適宜、句読点を付した。

(七) 原本に文字の訂正がある場合は、改めた文字のみを翻刻した。

(八) 底本の校訂に使用した三本のうち、^㉔本には脱文箇所がある。^㉕本の脱文箇所を始めと終わりを三角印▼▲で示した。

(九) 底本と諸本の間には異同がある場合、その主な異同には翻刻本文の該当箇所には波線を施し、また校注番号を附して、その異同を各頁末に注記した。

『藪医問答上巻』

やむことなからむも、いやしからも、暇あるおりしも、しつかなる夜すから月にあかし、又は灯をか、けつとして、をのかし、の心ひとしからんと語なむ時、おほやけ私にしへ今の世の人の風情心さま、よろづにつけて、うきも、おかしきも、はつかしき事も、かくろへことも、誰かもらしきこへさらん。さるかたはらに、筆の「しり」とるしれものありて、書とめたらんを後に「見つけたらん、いかにかたはらいたき事あらん。橘常実ある夜【一オ】入来て、例のうち乱たるつゝてに医学の次第を問給ふれば、いつこに心を「露をきなん。言葉にまかせて人の上も「身の上もいひちらし侍を、残らすして見せられたり。こは筆のしりとるしれもの、たくひよと打おどろかれて、取て「さき捨なんとせしをうばひかへし給ひぬれば、せむかたなくて、「いてそのしるせし物に名を付むとたはふれしを、しちにとりなして、せちに「せめらるゝも又おかしくて、終に藪医問答とかきてとらせたり。「我國のことはさに、くすしのわるものをは、やふと云に【二ウ】思ひよりける也。そも、藪くすしとはいかなる事のおこりにか云らん。我も知らず。

【二オ】

一問曰「それかし久しく医術に心さしありといへとも、いつれの書をまなひ、いつれの流を汲てその道にいたらんことをわきまへしらす。年ころ「なれきこえ奉れと、は、かりてなん云出る事なし。「かくて

はいつまでと今うつたうる事になれり。ねかはくはさとしみちひき給ふへくやあらん。」答曰「かゝるおほせことをうけたまはるに付ても、身の才のつたなく、術のおろかなる「か、はつかしうかへりみ思はるれば、申へきかたもなき心ちそし侍る。しかいひてやみなは心のへたてであるにや【二ウ】とおほさんかつらければ、おもひよりぬるすちを語る「なるへし。それ、医の道をまなふには、心さしのむかふ所をた、しうし、学問の次第をみたらさらなむ本根とやせん。心さし不正は、つとむるにつたなし。学問の次第みたりなれば、其術つゝるにならず。「世人をみるに、心さしのむかふところ、さまざまにこそあれ、入門のはしめより、これによりて世路を渡財用をもとめんとおもふものあり。或はひとへに文学を修して人にしられなん、医術は其間にをのつからし出んとおもふ「も有。或は親子眷属、【三オ】又は身の修養の為、人のうれへをすくふためには、此術にしく事あらしと思ひ取て心さすもあり。或は大医名家の子「むまこたるは祖父のほまれを「おのれにおこりて、学びずとも「業はつきなんと思ふ人も有。まなひすして業なる人は代々其家に上池の水をたくはへてのむ事やある。又「生れなからにしてしるにや侍らん。我思ふ処にあらねはさしおきぬ。「彼渡世のためと心さす人はいは、道の成とならさると、術のうむとうまさると、おもひ「わつらふ事なし。た、人にくすりをあたへ、むくひを多ん事【三ウ】をのみいそくめれば、やまと文字の医書の四まき五巻「よみおほえ、名方なといふたくひをおほく書あつめ、針灸の要穴数所を問ならひ、なにかしそれかしの医院の門弟と号してうるはしく身かさり、あたらしき興にのり人あまたくしたれば、あつはれ良医なる「哉と見ゆ。世の人これにめて、愁あ

る時治療を望む。幸ある「三物」「五人十人しるしをうる事あり。そのあひた「三し、こらかしたるもある「三へけれど、みつからはいみていはす。外よりはあなかちに「三なにかとかめん。されはしるし【四オ】をえたる事のみ、さだかにしも「三なく、をしはかる斗にほのめかすを、そのかたさまの人、やかてうけひいて、又なきやうに世にひろくほめののしるまゝに、大官国主もこれを称す。後には大門高樓をいとなみ、榮曜子孫にをよふ。さまで幸なき人もほと／＼に付てともしからぬものおゝし。けにも「三医を業とするもの是をうらやみて誰もたれも利あらん事をさきとするはことほりとも云へし。又文学を修して名をたてんと心さす人は、「四四書の注疏抄書等を【四ウ】みて、文義さへ少とけぬれば、まつ徒をあつめて講説をさす。五経のかたはしをも、こゝかしこ一章一篇は「三おほひたり。子史・仏藏・「三常巻・詩文集、さては本朝の記録・物語、代々の集哥までところ／＼うかゝひ見るまゝに、哥連哥の席にも「三のそみ、もしの数さへたりぬれば、はゝかる所なく、いひつらぬ。まいて詩・聯句の座にまはりては、句声さへ調ぬれば、口とく吟し出す。「三医書は家の物といひて、よろつの書をひき出していひちらし、世に大才大智の人といひはやさる。しかるに業とする処をう【五オ】かゝへは、年ころの学は出あはぬにや、近代の万病回春・古今医鑑・医書大全・局方のたくひを、病にたいすることに俄にくりひろけて、症候のあひたる方をとりてつかはす。たとひ偶中ある時も、おのれ此方の心をえされは、此理に「三とりてしるしありともわきまへす、只妙方なりと思てひめをき侍る。あやまりたるをは、いかてかたゝさん。さわいへ「三と、後世のためと志ぬるものも、名聞のためと「三心させしも、みな本意を「三はとけぬるそかし。

只「三正道の学は名利をもとむるかたにうとき故【五ウ】にや、心さす人稀なり」とうちうめき給ほとに、常実答て、「三それかしいやくも弓馬を家と「三すなれば、是を名利の為と心さすには非ず。修養「三慈仁のたよりと思寄ぬるにこそ侍れ」といへは、「ありかたく思やり給へる物かな。され「三と正学するものとして、金玉を淵になけ、山林に身を入へきかは。其道を修しもてゆきて、うちにかへりみてやましき事たになく、義によりてえさせんをは千鎰も辞せし、理にあたりて「三ほまれあらんをはなとかのかれさらんとは【六オ】せん。只是しめより「三うれば名利を求めて道術をもとめず、是は道術をもつはらとし名利を思はさるとの隔てあるによりて、かれは財用にとめとも「三道術にともしく、是は財用にともしけれとも道術にとめり。これをよし、かれを「三あしと云にはあらず。かれは「三かれをし、是はこれをす。をの／＼このむ所にしたかへる也。其上、正学するものはかならず上手に至ると申に非ず。「三古人の言葉に、学ひつとめてもつるに高手にいたらざるものもしは有、不学不動して高【六ウ】手にいたるものはかならずなし、と侍るを深く信してまなひつとめんと思ふはかり也。只うらやましきは、そのことく弓馬を業として、孝養慈仁のために此道を修らるゝにて「三こそあなれ。我は「三産業として「三奉禄をさへはみぬれば、「三心を人にもまかせず、やゝもすれば道術にそむく事のみありて、くちおしう「三はつかしう思給へらるゝなり。」

一問曰「心さしのむかふ所不正は道にもそむき、終に其術高手にいたる事なきことほり【七オ】うけ給てのち、きもにめいし心にそみておほゆ。学問の次第はいかゝし侍らんや。」答曰「儒学「三に大小の次第ある事、そこになを「三心得たまふへし。それ儒門小学の道も心の工

夫なきにはあらねと、洒掃・應對・進退の法、六藝の事を身に修することなれば、行上によせてをしゆる也。大学の道も、内にしては父兄外にしては君老、いませは洒掃・應對・進退の法、六藝の事〔二〕あたちおこなはぬにはあらねと、天命の性理を〔三〕事々物々に工夫するによつて心上につるてまなふなり。【七ウ】こゝをもつて小学は小子の学、大学は大人の学と次第せるなり。古聖の道おとろへて後、大小の次第みたれぬれば、学はた、記誦詞章のわざとなりぬ。これをなげき愁て、朱子文公諸経伝のうちより撰とりて、小学の書を作くせられたり。本朝にしても儒教をたつとしと思はん人は、先此事を学ひ、公家是有職の方、武家は弓馬の法を身に修し、其後大学の道にいらんは、つるてよろしかりなん。医学もかくあらまほしき事と思ふに付て、しらぬ儒門の沙汰に【八オ】およほせり。さて医家に大小の〔四〕学の次第た、しくわきたる事をは、いまた見付侍らす。徐彦純と先師〔五〕意庵先生〔六〕医学は只諷誦のたよりをもつはらし給ふ。おろかなる心に思ひよせぬるは、第一に薬品の気味・陰陽・功能の理を究る事、三百餘種。第二に方の製法并に古方の本指を弁する事、三百餘種。第三に治病の大法を諳する事、凡五十門。第四に古医按に参する事、〔七〕凡五百条。第五に診法のこと。第六に針灸穴法経絡をわかち、治理をた、【八ウ】す事、凡百餘所。第七に前の第六条を学する餘力に講説をきくへき書、十部許。是等をや小学の次第と申さむ。」

一問曰「小学の次第を定らるゝに、薬品を第一とし給ふこゝろ、又三百餘種にかきり給ふは、数すくなくやあらん。其理きかまほしうこそ侍れ。」答曰「病者のたのむところは医なり。医の〔八〕たのむものは針灸薬なり。針灸の道は今の世にたゝしかたき事も〔九〕侍り。初学のをそ

るへき事もあり。されは、はしめより成功の終まで捨かたきは【九オ】薬なるへし。其上、薬品の気味・陰陽・功用をきはめ沙汰するうちに、治病の法、診脈の道すこしはしらるゝことのあれば、最初の学問と〔一〇〕するなり。治病の法、診脈の道しらるゝと申は、たとへば人参条下のさたをするに、眩暈を治すると有。眩暈は痰火よりおこるあり、賊風よりきたれる有。此二症には別に君とする薬あり。只気虚の眩暈に人参主なりとをしゆ。大黄条下に腹脹を治すと有。腹脹は虚より発する有、寒より生する有。此二症には外によろしき品あり。只実【九ウ】熱の腹脹に大黄あたれりとすとす。每薬如此なれば、治病の法しらるゝにあらすや。〔一一〕脉実なる諸病に人参は不用。去ながら虚症の人あやまりて、〔一二〕俊剂をのみて、実数のかたちになる〔一三〕事あり。虚証たる事をよくわきまへしらは、用へしとしめし、脉虚微なる諸証に大黄は可禁。然るに積聚ありて経脈洪滞し、虚微のすかたをあらはす事有。積聚たる事をたしかにしらは、用へしと云。又每薬如此ならば、診法のしらるゝにあらすや。それ三百餘種にかきる事は、神農本〔一四〕注に【十オ】のせたるもの三百六十五種、一年の日にあたれり。其後、歴代の〔一五〕明医増加せる物、かれ是すへて二千餘種にをよへり。この品の気味・陰陽・機能をひとつゝきわめんとせば、心とき人〔一六〕と云とも数年をおくるへし。よし数年を送るとも事たらずはいか、はせん。そも神農の時三百餘種なり。たらずとて治せざる病あらんや。仲景、潔古、東垣、河間、丹溪は百世まで〔一七〕医家の師たるものなり。彼諸君子作せらるゝ方書、記せらるゝ医按をかつかふるに、三百餘種に出すと【十ウ】見えたり。其内二百餘種はいつれも用たり。七十種はかりは其人はもちひ、其人は不用物あり。たかひにこのむ所

あるによれるなるへし。今、東垣、丹溪同じ世にゐまして一人の病を治せんに、証を見たるところ治を案する所異ならずとも、薬品はいさゝかかはる所あるへし。又たとふるに薬は我士卒なり。我、薬の大將なり。病は我敵なり。智謀もなく、軍制もたゞしからぬ大將の、よりあひ武者の心もしらぬ人数をなましいにおほく引卒せは、国を損し人民をわつらはしめ、かたき【十一ウ】をほうち得ずして、はてはをのれかほろふる事にやならん。「五頼光ゴライクワウなどやうの武將に、綱・公時かたくいカタクイの心をよくしりたのもしからん英士を三百騎はかりあひそへ、誅伐をおこなはしめは、たいする敵はまれならんかし。又饗膳のつかさとするものをも見たまへ。わるものは異味珍肴をもとめて、よくもし出さず。上手はたゞこゝもとの魚鳥菜菓をもつて美味を調す。医家も常に用る薬品をこそ、先きはむへきに、もとめかたくうたかはしきさたす。なにの用にやすらんと、おほ【十一ウ】つかなし。」

一問曰「薬品の気味・陰陽・機能を、なにときはめ侍らむ。」答曰「薬類は『金玉・沙石・草木・鳥獸・虫魚、器物の禿筆敗鼓の皮までを用ゆ。万物みな陰陽を不備ものなきによれり。陰薬は陽病にたいし、陽薬は陰病をしりそく。純陰のものあり生寒、純陽のものあり発熱。陰中の陽はほる。陽中の陰はくたる。陰陽升降の妙なり。もとより有毒のものあり、無毒のものあり。氣力柔弱なるあり、剛烈なるあり。』【十二オ】其薬其蔵府に入、其経絡にはしり、其関竅にむかふ。其薬と其薬とにくみあらそふ、此薬と此薬とちなみよしみをなす。是、皆人の気性のことし。初生より一定する也。人は万物の靈にして五行ごとくそなはる。人すら五行をうくる所、正偏多少あるによりて、智愚賢不肖あり。薬類は偏物なるによつて、木火の氣をうけて、『木

火の氣をましへざる有。ちきに火とひとしきあり、水とことならざるあり。人は有知にしていつはり有、薬は無智にしていつはり【十二ウ】なし。爰をもつてしりやすし。此等の事なにを以てかきわめわきまへんや。氣・味・香・形・色をもつてわきまふ。氣・味・香・形・色なにとしてかする。五形の木・火・土・金・水と五色の青・赤・黄・白黒は見てしる。『五氣の臊・焦・香・腥・腐はきいて知。』【五】五味の酸・苦・甘・辛・鹹は大方こそはあらめ、こまかなるにいたりては、なめて知へき事に非ず。いはんや、五性の寒・熱・温・涼・平をや。むかし『炎帝神聖』にしてなめて教たり。後賢、是【五】につるて書に筆【五】して伝へたり。『故氣味は本經と諸本【十三オ】草にをしまかす。しかるに神農と後賢と世をあさむかざる事、いかてかしらん。其薬、其病を治すとしつたへたるをしたかひ用るに、【三手】に應してしるしあり。こゝをもつてあさむかざる事をしれり。又薬の機能ををしもつて氣味を察するに、其性かくれなし。あやまりつたへたる物たゞしうしつへし。氣味をはかりもつて機能を見れば、其理明かなり。うきたる説のそき捨へし。其上、諸本艸に附方あまた載て参校のたよりをなす。如此きわめあかさは、薬類の氣味・【十三ウ】陰陽・功能うたかはしき事すくなかるへし。』問曰「今、能毒本草とて世に用るあり。はなはた捷便なり。初学先よみおほゆへきものにや侍る。」こたへていはく「是先君子理慶翁、師としつかへし、一溪老人撰出なり。丹溪先生か能毒に可否ありといへる儀にもとつて、病に應するを能とし不應を毒とす。よつて書の名とせり。其心尤よし。しかるに氣味・陰陽の説をのそかれたれば、能といひ毒と云、なに、よりてか其理をかにかへしらん。思ふにかの老人、氣味陰陽の理をは、【四】かくわ

きまへておは【十四才】せむするか、初学のさとしかたき事とおもひはかりて、かくこそとおほゆ。されと、医といはん^{〔三〕}からに、捷徑^{〔四〕}便用をよるこひて、その本源をきわめざらんや。能と云るも不用理あり。毒といへるも用義あり。又、諸本草に不載^{〔五〕}事をも時のよろしきにしたかひて用る事常におほし。是につきて申述へき事あまたあれと、いかてかさば。」

一問曰「方の製法、并に古方の本指をわきまへしる事を、第二条についてはも三百首許にかきることほり、うけ給りたくこそ侍れ。」答曰「是も兵家【十四ウ】によそへて思ひ給へ。大将たる者士卒をひきいてかたきにむかはん時、軍法さためすやあらん。医も薬品をあつめて病を治する時かならず製法をさたむへし。製方にさま／＼侍れと十剂七方を專要とするなり。兵家、魚鱗・鶴翼・^{〔六〕}八陣の勢のとし。十剂とは宣・通・補・瀉・輕・重・渋・滑・燥・湿を云也。^{〔七〕}北齊の徐之才はしめて著述せるなり。本より聖經にもこの心あれと散^{〔八〕}在せるを、^{〔九〕}之才か一所よせて十剂となせり。これ方を製する大体なり。^{〔一〇〕}病証【十五才】を診察し治療を工夫する時に、をのつから虚病には補剂、実病には瀉剂となるものなり。諸賢の説々あり。かさねてきわめ給ふへし。七方とは大・小・緩・急・奇・偶・復をいふ。是古聖の真法也。しかるに七方の本は君臣佐使なり。君臣佐使を分別して後、病の所在・標本・真邪によつて、其病には大剂にすへし、此症には小剂をあとふへし、あるひは緩剂、あるひは急剂、あるひは奇剂、偶剂、復剂と製するなり。みつからたかふりて人をおとしめんとに【十五ウ】はあらねと、世医、書を講する時には文にたいし^{〔一一〕}てさりかたく也、かやうの事をさたせられぬれと、病にのそみ治をほとこすにいたりて、

古方をも用よかし、新方をも作せよかし、此法しらひ給へるはまれなりと見ゆ。いかなる道をか伝へ来ぬらん。便捷なる事あるへし。殊更奇偶の深理をはなにかきはめ給ふらん。奇とは数の単なるもの、偶とは数の合する物とはかりや。心うらん。惣して天道の妙理をも数^{〔一二〕}ならてはかりかたし。故邵氏は数学より【十六才】性理にいたり、^{〔一三〕}程氏は性理より数学に長す。其始終異なるやうに侍れと、道に帰する所かはらず。抑数を捨て医道の深理なによりよつてはからんとすらむ。しはらくかやうの論はさしをき侍るへし。君臣佐使の^{〔一四〕}義、あさはるなる^{〔一五〕}身によそへても見給へ。饗応の時、必飯と羹と湯と酒となくては、かなはざるかとし。单方とて一薬を用、小方とて二三味用る事もあれと茶清、塩湯、温酒、冷水にてあたへ、又修製の法に心得あれは、君臣佐使はあるものなり。【十六ウ】こゝもつて毎治每方是をさる事あたはず。君とは病をつかさどる物、臣とは君薬をたすく物、佐とは臣薬のたすけとなる物、使とは導引する物を云。寒病には熱薬必君、熱病には寒薬必君、^{〔一六〕}虚病補薬、実病には瀉薬必^{〔一七〕}君とす。病にたいするをもつての故也。臣には君薬と気味おなじきも用、気味異なるも用ゆ。とかくに君薬の輔となるものを用ゆ。佐は臣薬の君のたすけとなるかとし。気味の同異きらひなく臣薬のちからを増ものを【十七才】用ゆ。しかれとも、佐にはさま／＼の心得あり。使も又おなし。一二をあけて申さん。寒病に寒薬、熱病に熱薬、塞に塞、通に通を用るは反佐^{〔一八〕}嚮導の心あり。あるひは猛烈の物を用て君臣をいさめ、威をふるわしむる事もあり。或は^{〔一九〕}叛逆の物を合して君臣をいからしめ、病をおひやかしさることも有。制するものをくはへておこりをおさふる例もあり。かくのこときのたくひ不可勝

「回数」。又兵家のかたにしていは、君は大将、臣は先陣後陣をなす
 「副将」佐は先陣後陣の【十七ウ】うち左右のそなへをつかさとり
 副將のたすけとなるもの、ことし。使は足輕大将、使番うき武者など
 云ものにやあたらん。兵法の面しるき手たてはこゝにあるとなん、ふ
 るき人の語し「四か、さる事や侍る。そこに「四こそしるしめすらめ。」
 問曰「当世の医家、一流はいふ。古方は新病に對すへからす。同病な
 りといへとも、時により人により所にしたかひ、其後法かはるへし。
 必新方を製をせよと。一流はいふ。「我身、故人にをよふへからす。
 我智まして故人にまさらし。【十八オ】故人後学のため、あみおける
 事なれば、必古方を用へし、みつから方を製すへからすと。いつれか
 是にしていつれか非ならん。」答曰「古方は新病に對せすと云ふも先
 賢のおしへなり。「我身故人にをよはすと云も名医の言葉也。しかれ
 とも一偏に心へ給は、あやまりあるへし。いかにと云に、古方は新病
 にたいせすといひし先賢の「治療見るに、傷寒發表には麻黃湯、攻
 裏には大承氣湯を用、氣虚には四君子、血虚には四物を用たり。一切
 に古方【十八ウ】を不用新方を用と云ほとかたくなる人は、薬品の陰
 陽、製方の通變もしり給はん事おほつかなし。その人の製せらるゝ新
 方服せんことあやうし。又一向に新方は製せず、「故方を用ゆといふ
 はかりおろかなる人は、古方の立意、治法の応機わきまへ給はん事う
 たかはし。其心よりえらひ給ふらん古方心みん事勿体なし。ひそかに
 思ひ侍るは、古方を用るも新意を出す時は新方、々々を製するにも旧
 法にならふ時は古方ならん。たとへは氣虚を本として【十九オ】「痰
 証をかねたるものあらん。六君子湯を「あたふへし。氣虚を本とせ
 は、人参君、甘艸・白朮臣、茯苓・陳皮佐、半夏を使とすへし。痰飲

を本とし、氣虚をかねたるものにも六君子湯をあたふへし。痰飲を本
 とせば、半夏君、陳皮・白朮臣、人参・甘艸佐、茯苓使たるへし。是
 古方「は新方にあらすや。又血虚の寒病あらんに、みつから工夫し
 て、当歸君たるへしと定め、川弓臣、熟地佐、芍薬使とおもひよする
 をとりかへしてみれば、則古方の四物湯たるものなり。是新方は【十
 九ウ】古方にあらすや。病にたいしては治法をこそ工夫すなれ、何そ
 はしめてより必古方、必新方とされたためおく事あらん。一向古方を用
 と云人は、高叟か説詩膠柱するたくひとやいはん。一切に新方を製せ
 よと云人は始皇か替政移木のともからとやいはん。又古方の本指をき
 はむる事を三百首にかきるは、先古方と云は先賢の後学のために、わ
 さと症をたて方をあらはして、かきつたへたるもあり。又當時病家に
 たいし、製作とせしをしるしと、めた【二十オ】るもあり。黄帝・岐
 伯・扁・倉・華か方とて今に少々残りたるもあれと、実にさあらんと
 おほへぬおほかり。只後漢の張仲景を諸方の祖とす。まことに医門の
 規矩華繩にして、後の方円平直をなさむものなり。仲景、傷寒論・金
 匱要略をあらはせしよりのち、代々の勅制、家々の集録、七輪車に七
 車つむともつきかたしと見えたり。これをえらひつゝ、まやかにとり用
 ゆへき事のよひかたからんことを思ひわつらひ侍りに、一年、古
 医「按校して【二十ウ】「諸家の用る所の物もおほからすと思ひ
 たるより、旧方の諸疾に變通し後式になるへき物をあつめぬるか三百
 首はかり有。故に其教おかきりとして同志のものとともに学ひんとす
 るなり。」

一問曰「治病の大法を第三「四」条の学とせらるゝ、心はいかにそや。」答曰
 「又々兵法によそへておほせ。それ人の讎となるはしめ、土地をうは

はんとするか、財宝をむさほり、或は多年の宿怨よりおこる也。病も
 しかり。内七情を【二十一オ】つゝします、外六淫におかされ、或は
 酒食をむさほり、或は色にふけるをもとゝするなり。抑軍をせんする
 もの、敵のをる所の要害、道路の險難、山沢江河のある【四】所しらさ
 らんや。医工も病のある所の關節、あるひは蔵府経絡、或は肉腠筋骨
 はからざらんや。又今むかひぬる敵のはたらき、勢の多少、兵の強弱、
 かんかへざらんや。病をあらはず証候、其寒熱・痛痺・虚実等、是に
 ひとし。その病因と病の所在と【四】病証とを察して、薬劑をあたへ【二
 十一ウ】針灸をほとこすを治病の大法を【四】諳するといふなり。薬
 性をきわめ、【四】製方をわきまへて後、是を学ふへし。故に第三次にお
 けり。しかるに病固・【四】病証・治法をあらはせる書、又いかほと
 【四】牛にかあせあらしめん。つらく初学のしりやすくして理ふかく、
 おこなひやすくして道たゞしき物を案するに、丹溪方法にしくはな
 し。その知やすくおこなひやすしといふは、たとへば腹痛門に曰有寒
 有積熱有食積有痰有死血といふかことし。先はやく病【二十二オ】因
 をしらしむ。有寒有積熱、いたむもの、症はかくのことし。有食積有
 痰有死血、いたむもの、【四】症は又々かくのことし。是症をとひて【四】推
 察しやすからん。この症の薬品は是なり、その症の方劑はそれなりと
 するす。是終に治法をあげて帰する所を實にはしりやすくおこなひや
 すきにあらずや。然共、詳略あり。その略せるものをは諸名家の説を
 取ておきなふへし。学者五十門はかり其理をきわめ、其【四】法をあき
 らかにし、常に胸臆に【二十二ウ】記得するならば、病にのそむ時、
 治法必心にうかふへし。丹溪か方法は丹溪一人の心にあらず。仲景・
 東垣・河間か心なり。三先生の心、又黄帝・岐伯・扁鵲か【四】心也。

ちかきをもつてあさしとすへからず。」

一問曰「古医按に参する法いかに。」答曰「薬性を能きはめ、製方をよ
 くわきまへ、治法をよく請はるものは、学も実に思惟も熟す。しかる
 に、此術は人の生死のかゝるわさなれば、佗技にならふへからず。猶
 よく【四】みつからこゝろ【二十三オ】みてのち、人の病を療すへし。
 身みつから心みん事は、医按参究よりよろしきはなし。【四】其法、古医
 状の矜式となるべきものを、師家えらひとつて、もとの察証の書と記
 録の劑とを抜きつて、学者をしてみつから証を断り劑を案せしむ。是
 禪家【四】密参の式にならふ。五百条のおほきにわたらしむる事は、お
 ほく執行すれば功績つもの、久しく学習すれば工夫透徹する故也。な
 す所は禪家参式にならふといへど、実は春秋の大儀にのつとる。【二
 十三ウ】それ春秋は魯史二百四十二年の間、人の行事につゐて上天王
 より下土庶人にいたるまで、其美悪をかんか見て、褒貶賞伐を聖人の
 筆にあらはし給ふれば、云者はとかなく、きくものはおちをそる。誠
 に天下後世の大経大法たるもの也。我医按の法、古人の格にあたらさ
 る時は、師より貶斥の責をうけてをそる。あたる時は称美の事をかう
 むりてすゝむ。又あたらすといへど、人を損せずして後の戒を得、あ
 たるといへど、功には【二十四オ】こらすして、のちの法となる。医
 学最要の儀なり。」

一問曰「脉学は諸家大略最初の事とす。今五条に置、其序たかふへくや
 あらむ。」答曰「誠にのたまふことくには侍れど、脉理▲浩博にして
 しかも微妙なり。不才の人初学の者に悟しかたき事おほし。以前に薬
 品、古方、方法、医按等、講究する間、をのく診脉のさたあり。殊
 更薬に対し、古方によせ、治法に合し、其理をたゞし侍れば、脉書を

よみてうはへの【二十四ウ】解儀せんよりは、実に心得となる事まざる【四】也。こゝに脉学の素質一二分なるなり。此時にいたりて診家にいらしめは、素地に【四】五采をほとこすかことく、うけやすく侍らんと思ひはかりて、第五【四】条の学とする也。」問曰「診学の大法いか、【四】侍らん。立談しかたし。後日に問まなひ給ふへし。」それさしも侍らん。しからはつねにいふかしき事のかたはしをたつね申さん。先脉の体はなにもものそや。」答曰「脉の体は血なり。血を動揺して、脉の形をなす物は気なり。気をいたらし【二十五オ】むるものは【四】神機なり。たとへは【四】溝渠の浪のことし。浪の体は水なり。水を動揺して浪の文をなす物は風なり。風を相扇かしむるものは造物なり。」問曰「脉動によりて、【四】死生吉凶を決するはいかなる理そや。」答曰「脉動は血氣の用也。天運は陰陽の妙也。仰て天運を見給へ。蒼々々々たるのみ。然るに日月五星循行に度あり。昼夜四時の代謝に数あり。【四】万物の榮衰に跡あり。是によりて天運をはかり【四】鬼神の變化をうかふ。人は天地に似たり。故に【二十五ウ】経絡筋骨の分量に度あり。榮衛氣血【四】の流注に数あり。脉動【四】こゝに應ず。こゝをもつて脉動をかにかへ【四】神機を察す。内経にいはいく、一呼脉再動、一【四】吸脉再動、呼吸定息脉五動、是脉動の定数なり。もし定数にをよはされはやむ。あまりあるもやむ。又脉の形部位にしたかふ定形有、四時【四】に應ずる定形あり。部位と四時との定形【四】に合する時は、浮沈・滑瀯・大小、皆平【四】脉なり。部位と四時との定形に不合は、浮沈・滑瀯・大小みな病脉なり。病脉の微甚、胃氣の有無をもつて【二十六オ】死生吉凶を決するなり。」問曰「一身諸部の脉動を捨て、寸口一所にして五藏六府の脉をうかかう。其理は何そや。」此法内経にあら

はして、其理難経にあかせり。申にをよはす、只魚際の下、関骨の上下は百脉【四】朝会して始り終る所なれば、爰にて一身の脉を相決すと思ひ給ふへし。たとへは、四海九州の治乱興亡をきかむには、西海の事は鎮西、東道の事は東関、南国は南方、北陸は北方。其ところ／＼にいたりて問へきなれと、【二十六ウ】往還たやすからねは、只帝都一所にしてきくかことし。四海九州の人物、帝都にあつまり、諸国の政天子よりくたり、又天聴に達するか故なり。」問曰「左の【四】三部心肝腎、右の三部肺脾命門に配す。此所は実に肺藏一經の脉動なり。五藏【四】六府は只かりに【四】侘せるなり。左寸は必心藏、右寸は必肺藏と【四】思へるは【四】おろかなりと云説あり。是非いか、分へき。」答曰「是理儀に縛せられて、至道をきかざるもの、言葉なり。それ左右の三部は肺藏手【二十七オ】大陰一經の動脉たる事、くすしといはんほどのものか知らぬ人や侍らん。然るに黄帝岐伯の聖人、扁鵲【四】花佗か神医、受授しきたれる部位なり。誰かこれをあらためん。理をもつておすに、五行の相生相剋に配し、天地六合の位にあたり、藏府上下左右の部分に合せり。【四】くた／＼しけれど、いさゝかこの儀をのへん。五行の相生と云は左尺の腎水左関の肝木を生し、肝木左寸の心火を生す。心火と右腎の相火と同一氣、故に右尺の相火、右関の【二十七ウ】脾土を生す。脾土右寸の肺金を生するなり。相剋をもつていは、左尺の腎【四】水、右尺の相火を剋す。火の子右関の【四】脾土きたりて、左尺の腎水を剋す。水の子左関の肝木きたりて脾土を剋す。脾土の子右寸の肺金きたりて肝木を剋す。肝木の子左寸の心火きたりて、肺金を剋す。たかひによく相生したかひによく【四】相剋す。みな【四】天地の道なり。天地六合の位をもつていへは、南方の火、東方の木、北

方の水、皆我左手にありて、上中下の位に居す【二十八才】へし。西方の金、【中火】の土、水中の火、皆我右手をつかさとり、上中下の位に居すへし。藏府上下左右をもつていへば、心肺は上焦、左右の寸、肝脾は中焦、左右の関、腎命門は下焦、左右の尺に配すへし。又是を帝都【四】にして四海九州の事をきくにたとへば、帝都は官府なり。【五】国司受領皆居せり。寸口にして諸部をわかち諸藏をうかかふ事、其国々の国司受領の家にして、其国々の事をきくへきかことし。只診脈の時にいたりては聊口実ある事あり。【二十八才】ひそかに申さん。問曰「腎に両枚あり。皆水也。左尺も腎水、右尺も腎水をうかかふへきに【六】右来右腎を相火となし、あまつさへ心包絡・三焦を【七】つらねば、右尺にして診する事、其理なし。又右腎を命門と名付る事、靈・素に見えずと云説いか、侍るや。」答曰「是【八】載同父か説なり。同父は儒医【九】にして宏才敏疾の人なり。其教る事ひろく弁する事精し。しかれとも我は信せず。腎に両枚ありて、脊骨【十】四椎の左右に附着する事かくれし。又五行【二十九才】の中火の一行わかれて兩位をなす。一は君火、一は相火也。是又自然の儀、君火は人火、【蔵】に配して【蔵】は心火なり。相火は天火、天地の【間】にしては龍雷の火なり。人の蔵よりにしては心包絡なり。心包絡と右腎と系相つらなる。【左】寸はすてに心・小腸の脉に配す。しからは包絡の相火右尺にしてうか、はさらんや。相火は時にしたかつて発動す。定所なきに似たりといへとも、五行の氣位をもつて云時は、午酉の間にあり。故に心包絡は心をつ、み肺につら【二十九才】なる。又、丹溪先生【蔵】か相火の位を肝腎の間と云るは、子卯の間をつかさとりて云。子卯は肝腎にあたる故也。是皆発動の所について云。帰着する所をいへば、雷は地中に伏

し、龍は水中に潜る。乾の初九にして戊を主る。これを【我右腎と】なし、右尺にしてうか、はさらんや。我、命門三焦の説をつくりて一書をなせり。いとまの目見せたてまつるへし。三焦の經と膀胱の經と相交ともに腎に属す。しからは【旁光】左尺、三焦は右尺に列すへし。【三十才】右腎を命門と名付る事、同父か云ことし。内経にあらはすといへとも、物に名付る事は理によりて【仮佗】す。右腎は男子は精をかくし、女子は胞を繫。人の生命の門戸なり。是を命門と名付る事とかあらんや。内経に寸尺の名ありて、関の事なし。扁鵲、陰陽の界限をわかたんだために、かりにまうけて後学にします。内経にのせざる事用ましきといは、【これを】も捨んや。又あやまりといはんや。」問曰「ある人の云、浮沈・遲数は脉の【三十才】大要也。よくきはむへし。脉経の廿四種工夫をついやすにおよはすと。此説如何。」答曰「かつて医道を知らざるもの、説なるへし。もとより【肉上】にあらはるゝものを皆浮と名付、肉下に得るものをみな沈と云。定数におよはざるは皆遲、定数に有餘はみな数。しかる時は、四の脉は惣括なり。滑瀉・大小をそへて、脉の大体をなはるへし。されとよるつの事多く聞おほくみて、ふかく精察しみつから帰する所を知を要【得たり】【三十一才】と云。はしめより要をまほりて、かんかふる事なきを簡略と云。簡略のものなにの要をかしらん。」問曰「諸書死脉を論する事、八種又十餘種。此脉あらはるゝものはかならず死すへきや。」答曰「八種の脉のたくひ誠に怪脉なり。然るに卒暴の【病】、此等の脉をあらはす。当時、神氣散亡する故なり。神かへり氣おさまりて、脉又復す。大体、病と脉と相合して吉凶を論す。たとへは瀆代結はあやしむへし。病によつて吉兆とす。浮滑はよろこぶへし。症にし

た【三十一ウ】かつて凶例とす。ひつきやう診法は常脈を知にあり。常脈をしれば、病脈を知。病脈をしれば、治すへきをさため、死生を決断す。準繩をもつて曲直をはかる【四】かとし。常脈をおほし。凡部位拳按の常脈あり。吾人陰陽藏府の相応なり。四時の弦・洪・毛・石、歳運の応【四】不応の常脈あり、天の時にのつとる也。形の肥瘦長短と性の緩急静躁と、男女と老幼と、又【四】反関怪異の脈とは天賦によれる人品の常脈なり。かくのとき常脈を【四】解了し、【四】臨時に精察して、病脈を【三十二オ】ことほるへし。いづれも一日の談論にあらず。」

一問曰「針灸の穴処経絡をはかち、治効を明【四】にするとは何そや。」答曰「【四】諸穴は血気の流注、神明の遊行する関要の所なり。故に薬を付、針をくたし、補瀉迎隨して、正をたすけ、邪を去、学者と素・靈・難・千金・甲乙・銅人・資生・聚英、其外針灸【四】科の書をとりえらひて、治効の理をたすへし。治効の理をたす事は、薬品の機能をきはむることくならん。経絡をわかち、治理をあきらかに【三十二ウ】せすは、針灸ほとこしかたきのみ【四】あらず、あやまる事おほかるへし。」

一問曰「講説の十部はいつれの書そや。」答曰「真人脉訣、湯液本草上卷、傷寒明理論、内外傷弁惑論上卷、局方發揮、格致餘論、原病式、脾胃論、難經、運氣、此事難知、刊誤脉訣也。是皆講説の次第をなす。前の六条を学習する羽翼となさしめん為也。此内刊誤と難知とは講するにおよふへからずとおもへど、脉の理、同父と友として疑論せんと心さす。難知は【三十三オ】理うたかわしき事なければ、言葉に異をこのむによつて、彼正学にくらき医師解し得ざる事ありと見ゆ。故に学者にしめさんとおもへり。【四】難經と運氣【四】とは上達の学なれど、先文

義しらしめんために、小学の教に入侍る。」

一問曰「薬品、古方、【四】治法、医按、診学、針灸等、各家書ありや。」答曰「【四】只草藁あり。今年より卜居偷閑、同志の【四】ものと成書をなさんとす。はやくは三年をそくは五年にして、功成の事をつくすへし。成書の次第、会集の【四】法式、ねんころに【三十三ウ】沙汰しをき侍る。今申尽しかたし。【四】佗日訊問にあつからん。我一生の心をあらはし述へし。」

一問云「ある人の、学者には治療の上手まれなり。不学者に却而治療の上手おほし。然時は医術は作意によるへし、【四】修学によるへからずといひしを、【四】それさしもあるましき事【四】とことほりしかは、学者にして術のつたなきはたれ、不学者にして術のよろしきはそれと、手をおりてかそへしほとに、あらずひにく、侍りき。【四】けにいふかしき事にも【三十四オ】こさめれ。」答曰「我も医工のたくひなれば、二品のうちにはかすまれたてまつりなん。さらは人の上を云に【四】あらざるへし。いてこたへ申さん。学者にして治術つたなきは聾者なり。不学者にして作意あるは聾者なり。それ聾者【四】は古今の書をもよみ、人のふるまい色あやをも見れど、云事をきかされは、ひとへに頑愚のことし。学者にして治術つたなきに似すや。聾者は糸竹のしらへこまやかなる事もき、わき、人のおもわくも一言のうちにしりて【三十四ウ】さかしけれと、声せぬ時は人のあさむくをも知す、杖をうしなひぬれば、道にまよひ溝に落いりぬかし。不学者の作意たてすることくならずや。世に学者と云も、【四】郡書をむさほり見て、ことをおほえぬるを云なり。【四】まことの道心得ぬるにはあらず。なにの治術のよろしき事あらん。作意ありと云は、をのれか【四】妄意をあらはす

「巫をいへり。いかてか治術の妙なる事あらん。古人の医とは意也、意とは巫妄意にあらずといひし是也。万の道も見給へ、まなひさるに「巫よき【三十五才】作はありかたし。あやまりはおほし。われ、かつて巫連哥の法式をしらす、ある時、興に入あまり一二句いひ出し侍るを、ある人のき、給ひて、作意ありと「巫見給ひしかうれしくて、「巫それよりたひくし侍れば、度かさなるほと作意も出す、すちなき事をのみいひし也。「巫連哥のよりあひ、さしあひ等ならはすしらぬ故也。「巫無学者の治術の作意これにひとしからんか、はた異ならんか。」一問曰「諸藝のよしあし、「巫大方見はかられ侍【三十五ウ】「巫ぬるに、巫医術はかりわきかたきはなし。いかなる故そや。」答曰「誠に巫さおほしなん。たとへはこゝにやむもの九人あるへし。三人は人の見る所はおもけれど、医方においてかるきものあり。三人は人の見る所「巫所さまてはあらで、「巫医法にありて死例にあたるあり。又三人は良医の手にし「巫ては生ず、粗工の手にしては死するものあり。さてかるき三人は粗工も治す、良医も治す。死例にあたる三人は粗工にあふても死す、良医にあふても死す。こゝにおめて良医粗工の「巫けちめ、【三十六才】大方の人のわかちしるへきことにあらずなれば、かるき三人のたくひを幸ある医師十人もはた廿人も治しぬれば、粗工といへと天下のほまれをかうむる。死例にあたる三人のたくひを不幸の医師十人もはた廿人も治しかゝりぬれば、良医といへと没身までそしりをまぬかれます。今の世の上手下手は医師の幸と不幸とにより。術の美悪によらず。只半死半生の人を治する時にこそ、けちめわかるへき事とおもへと、道理をわきまへしる人まれ巫なれば、富貴は【三十六ウ】おこりて保養おろそかにして禁忌をおかす、あるひは数医をかへて一

人の手にまかせず。貧賤は財をおもくして身をかるんし、医のことをそむきて巫の事を信す。世の人はや、かくのこときのみなれば、心あるほとときは、治をほとこそ事を常にいとへと、さすか招引のもたしくて、側隠のしのひかたきにひかれて出ぬれと、むさほるに似たる事をはち、人のひかめるかうるさくて、とかくあひしらひ、辞しゆつりさるはかりなれば、なをこゝにしても【三十七才】良医のけちめ見えさるへし。かやうの人を世にそしり云事をきけは、よひまねくにこたへさるしれものをさるものかと思はれは、生死をわかつ事もさのみあきらかならず、治療のほとも世にきこえねは、おもふにさしもあら▲し、たゝみつからたかふりひそむるなるへしとなんいへるところもすこしはことわりながら、生死をさたむることはいにしへの名医たにかたき事にいひ「巫をけり。又難治の病は上工も十に八九を治すとこそそひちりの文にもせ給へり。世の人「巫はともいふへし、かくも【三十七ウ】いふへし。かやうのそしりにあつかる「巫ほとの人、つとめて見たる事あるならん。我はつとめたる事もなくして老涯にいたり、病身にさへなりぬれば、今更まなひてもいつまてのほと、思ひすてたれと、朝にきて夕に死すともと「巫又心さしをおこして、初学の者とおなじつらにあさはかなる二道をとりにたてんとする折しも、問とふらひたまへは、そのしたひをかたり侍る也。かへす／＼人にもらす事なかれ」との給ふをきゝおるまゝに、鳥もはなやかにうち【三十八才】しきれば、又こそいとまたまはり、まかり出侍るにき。【三十八ウ】

『藪医問答下巻』

「²²²む月のほしめつかた、残れる雪をかきわけ庭の訓やきくとおとつれ奉りしかは、梅も漸ひらけて文²²³このむ友もかなとまつを、つれなきものとせしによくこそと出あひ給ふ。「²²⁴おと、の家につかうまつる事の侍りて参賀にさへをそくとかしこまり申とけふはいとまやある、心のかにとのたまふ。よきおりからと思ひてしははなにくれの物かたりしつ、又医学のことを²²⁵た²²⁶【三十九才】つねうけたまはりし条々。【三十九ウ】

一問「医家小学の次第をうけ給りしよりのち、人の十たひにせんをは百たひ、三年にわたらん事をは七とせにも心さしをとけはてんと、ひたすらにおもひなりぬ。思ふに医家にも又大学の次第あるへし。今うけたまはりてま²²⁷なふへきと云にはあらず。かゝるつゐてにそのおもむきを存せはたのしみならんと申す。」こたへて「いかなるおほせそや。以前に儒学大小の事をいひしは、医家の学もかくあらまほしき物なりとよそへたるはかり也。【四十才】医小学とは先輩もいひしかと、それさへをのれはさはいはしと思ふに、いかて医大学の道なと云事をかけても思ひなんや。しからは下学上達の次第とや申さん。あなむつかし。たゝわたくしの家の小弟にをしふる初学の法と云へし。さて初学体の外、教給ふ学は²²⁸なしや。それかし弱冠のころよりおもひよする古学のすち侍れと、世の風になひき塵にまはりて、おもひ立日もなくよそにあまりぬるかほひなさに、ことし▲より、ともよ【四十ウ】ほしけるに、心さしある友もあらず、初学の人のなすへき

事にもあらねは、かた／＼思ひやみぬれと、いのちたにつれなくは、山ふかき庵りもとめなん。はかなきあらまはしはなを日々をこたらす侍るかし。」

一問「古学の道いかに。」答「古先の直道をつたへ来て術の神異なるは、いにしへより今に扁鵲、華佗、太倉公にまされるはなし。ねかはくは、よりならばまほしくこそ侍れ。」²²⁹問云「扁・華・倉か術は奇怪にしてよりならふ【四十一才】へき正道にあらざるよし、きゝをよひしたかへり。」答曰「腹をさき腸をあらひ、異人につたへ神仙にあひしなといへは、誠に奇怪にわたり虚証をまうけなして、別術たるに似たり。然るに八十一難経、実に扁鵲か書たるへくは、たゝよく古先道を学ひえて、其術神異にいたれる人なり。華か色脉の論、華か論たるへくは、是又扁鵲か学をよくまなひえたるものなり。されど難経と脉経のうちのにりたる外、扁・華か正説とおもふ書なし。中蔵経【四十一ウ】のたくひはうたかはしき事こそおほけれ。後人の名をぬすめるものならんとおほゆ。一年史記をよみしに、太倉公か伝にいたり感ずる事ありて、古学の次第を思ひよせたり。先倉公か学の書目は黄帝・扁鵲・脉書上下経・五色診・奇恒・揆度・薬論・石神・陰陽外変・接陰陽禁書なり。うけよむ事一年はかり翫味する事三年はかりにして、診察し治療し死生を決する事、精良なりと侍り。けに伝授のたゝしくつとめならふ事のくは【四十二才】しければ、²³⁰扁・華とならひ称せらるゝも虚名ならず。」

一問「師も古学をなし給は、倉公か書目のことくし給はんや。」答「史にのする事、文章にしたかつて序する事²³¹おほしといへと、倉公か学の次第は誠に如此なるへし。いかにとなれば脉書をまなふ事、最

初たるへし。次に天道地理をしりて人身の形氣に合す、是上經の事也。次に人事を察して病變にをよほす、是下經の事なり。次に色診に【四十二ウ】明にして脉と病變とにましゆ、是五色診なり。次に四時に応する病をうかふ、是恒書の学なり。次になをたしかに脉理をもとめ、権衡にかけ死生を決す、是揆書の習也。次になを病の所在を案し規矩をたて、治すへきをさたむ、是度量書の習也。次に藥論にして方劑を明にし、次に【三】石神論にして鍼術をきはむ。是古先の学の次第にして、医道の能事畢ぬ。この外さしてなに事をかもとめむ。我此【四十三オ】学をかにかふる事ひさし。くはしき事をは申残し侍る。しかるに倉公か学は天地より人身におよほし、遠より近にいたりあさきよりふかきに入。今師伝の受へきなきにより、近きをさきとし遠きを後とせん【三】とす。その次第

第一經十二奇八穴法始終諸經主病治法鍼灸藥

第二榮衛循行度數主病治法鍼灸藥【四十三ウ】

第三筋骨皮部血絡分【三】肉九竅分寸所【三】主病形治法鍼灸藥

第四藏府形象所主所屬治法鍼灸藥

第五氣運常氣變氣病機治法鍼灸藥

第六望聞問切

第七生死決

第八八風虛邪四時所傷勞倦飲食色欲諸症諸治鍼灸藥是なり。」

一問「老師古学の次第その心をきかむ」【四十四オ】答「多年の心さしなり。いかて一朝一夕にかたりつくさん。然とも素意の千一をのへん。第一經絡の事、【三】むかし診学を心にそめしに、是を語せさりしかは、精微の【三】義にいたりて通しかたき事をおほゆ。氣運の奥を【三】さくら

んとせしに、病氣治術に付て達しかたかりき。靈・素をとつてよみ、難經・傷寒論をとつてえらふに、うたかはしき事おほかり。是によつて最初の学とす。それ【三】穴法終始【四十四ウ】たゝさんはやすかりなん。諸經の病形をわかち作法をさためすは、なにの用にかせん。治法にいたりては鍼灸のみといはんや。藥劑のみといはむや。三を【三】かねそなふへし。此等なに、よつてかあつめん。靈樞・素問・難經・傷寒論・金匱祖方・脉經・千金・甲乙を本【三】とす。【三】其外正学の名家錢仲陽、救山老人かたくひ數輩あり。さのみおほきにをよほすへからず。後の諸条皆しかり。第二榮衛の事、經絡たゝしもてゆけは、おのつからしる【四十五オ】かれと、【三】榮は脉中、衛は脉外、起所終る所、三焦、清濁升降・呼吸脉息・每刻每辰・每昼每夜・星宿日月に合するをかならずしるへし。しらすは病の本、治のほとこし、診の道、やみのうつ、はなをまさるへし。かくはいかなる事にか云。人の形体百骸、情意神用は血氣のやしなひたするところなり。氣の外をまほり、血のうちをめぐむものをさして榮衛と名付、いさゝかも逆する事あれはやむ。百病の源なり。靈・素・難、是をすれて、なに【四十五ウ】事をかあかす。しかれとも別に主病治法の条をたて、きわむへき事なり。実に医学をし給は、わか言葉をおほししる事あらん。第三筋骨等の事、經絡榮衛こまかにたゝす時、是又きわまれる事なり。然るに筋は骨をつかぬ。血絡は肉腠をまどふ。骨は身の柱、皮肉は牆壁、九竅は門戸、主人これより出人し穢物これよりをくる。【三】各つかさとの事あり、各やむ事あり。しらすはあるへからず。病形治法、内經に散在して載す。一所にあつめ【四十六オ】見るへし。諸賢の儀論とるへし。【第四】【三】藏府の事、經絡榮衛皮肉筋骨等は標也、五藏六

府は本なり。天地の五行也、六位なり。何ぞ「四」第四にくたすや。「二」大體、病は経絡「二」榮衛毛膚筋骨にあり。本に有事すくなし。藏にあるものに八九は死す。府にあるものも大難なり。やむことおほく治しうへきものを初とすなり。やむ事すくなく治しかたきものをものちとす。もし此次第たかふへくは、その学ひ給ふ時あら【四十六ウ】ためらるへし。是はわか心のおもむく所なり。かならずのちのさためとせんにはあらず。「又五藏六府のやまひ、いかにとして難治や。「藏は精神の舎宅にしてみちて実せざるもの、府は五こくの倉廩汚穢の駅館なり。実してみたさる物、又一身の根本なり。こゝをもつてやめはあやうし。「そのきはむる事とはなにぞ。「形象・所在・所属・病形・治「法」なり。この「身」ひろし。つゝまやかにとるへし。此事雑説おほし。聖典に【四十七オ】よるへし。治法、鍼灸・薬をえらふにいたりては、諸賢の説ましゆへし。正道にあらざるをはのそくへし。第五に氣運の事、前の四条において形体精意と病状治術と、すでにきはまりぬ。是ちかきものをきはむるなり。ちかきものゝ根本はとをきものなり。遠きものとは天道地理なり。医家にして云時は氣運是なり。氣運は變氣なり。變氣をかかふる事は常氣をのりとす。常氣とは四時八節の氣候【四十七ウ】なり。氣候の学ひろしふかし。数は知やすきとも云へし。理は知りかたし。理をしらざれば、医道に益なし。益なくはなに、かせん。其学の大体、曆術をしりて節氣歲月をきはめ、易書をまなひて變化をはかるへし。然るにそれかしいまた曆数をまなひす。学ひんとするに今曆家御算法の略をしるのみ。人のしるしらぬ、なにのさまたけあらん。かれを師とし、算法をしるへし。算法【四十八オ】を知らないは、諸経諸史のうち、その身を明せる所をと

りあつめ、皇極経世、天元、発微等をよる所とし、常氣の一書をなすへし。数をたにしらて理をしらんと云は、うはの空にやおほさん。それかし「平」平生の学文、是にあり。こゝをもつて経史のうち、諸儒の説、人のうたかはしき所、をのれうたかはさる事おほし。さるによりて、思ひよせ侍る氣運の事にいたりても、そのかみ師にしたかひかんかへし「身」【四十八ウ】もありしに、いにしへよりは是を曆日に合し日用の事となし、病機氣宜に配すといへど、方劑・鍼術によせて毎治の法となせるを見ず。毎年の運と氣とにつきてやう／＼藥劑の式を置はかり也。今なさんとする所は六十年一甲子を六十図につくり、曆日の節候に合し、病機治法を附すへし。治法は直に藥品と鍼所をさため變氣の一書となし、さきの常氣の書と上下とせん。是わか【四十九オ】心さしなり。其後易学をなさんか。易もいまたつたへたる事なし。今の易者と号する「太」太くひ、卜筮によつて吉凶を云にすぎず。なにの變化の理をかわかまへむ。なれと又かれを師とし、こなたには別に思惟する事あるへし。いかて易学をはよくしらん。聖人すらの給へる事あり。只万一の理をうか、ふたよりとなすへし。孫思邈か易をしらすは大医とするにたらずといひ、東垣か医は洪範にのつとる「二」二へし【四十九ウ】といひ、医和か蠱の説、丹溪か相火の論など見給ふへし。「二」二その外正学を心させしほと「二」二人、いつれかこれをしらす。しかるにしろおもむきのた、しきとた、しからぬあるへきなり。しはらく是さしをくへし。氣運一事の上にさへま／＼なるさたあり。王安道か運氣七節は素問の外にして、王氷の増する所と思へり。虞恒徳かか、はるへからすと云「二」二儀論、「二」二注石山か易覽の「二」二問略などは、馬宗素か生日に合し、其日やむ【五十オ】其経なり其薬を用ゆへしと云にま

される事かは。何間か五運六氣をむねとし病機氣宜を論せしは、尤專要を得たりと〔25〕いへど、いさ、か思ふ事なきにあらず。丹溪か陰不足は陽有餘、湿〔26〕熱相火の病多と云は誠に基本に〔27〕達め。されと着述なし。潔古・東垣の薬性を弁し治法を論するに必こ、にもとつきしは、内経・傷寒論の玄関をうかひえたるもの也。然るに又選集なし。只劉温序か素問の入式と【五十ウ】なし補瀉の要となし、あつめし論奥の書、言葉つゝまやかに理ふかし。次序みたらす。〔28〕楊太受か毎日これをかかへて、風雨晦明を記すへし。時に応してやまひのおこるあり、伏氣の時にをくれてやむ〔29〕あり。故病の是について動するあり。常にひさしく心とめて熟すれば、自然に道にいたるといひしなとこそ、千古の教ともなるへき事〔30〕なれ。それ一甲子六十時すなはち五日一候なり。いにしへ氣候をたてしも、みな自然の數なり。變【五十一オ】氣をしらすは、常氣も〔31〕又あきらかなるへからず。今の世にはしらざる人なし。しらざる人〔32〕なきと云は、司氣司運をかかへて一時天行の病をしるを云。しる人〔33〕なしと云は、毎日毎時陰陽旋移をはかりて、病機補瀉の要とする事を云なり。〔34〕望聞問切の事、人身の形体をさため、天道の氣運をかかふるもの、人の為にやまひを〔35〕治すへし。やまひを治するにいたりて四知ひとつもかくへからず。恨る〔36〕所は四知の学絶たり。色を【五十一ウ】のそむと云も白は氣虚、黒は陰〔37〕虚、赤は熱、青は寒。声をきくと云も前軽後重は外傷、前重後軽は内傷、濁重は湿痰、呻吟は疼痛などのたくひなり。せめては症をねんころにとひ脉をたしかに診すへきを、脉は浮沈遲數のみをうか、ひてたゝに寸尺をにきり、症は寒熱疼痛のみをきひてたりとす。治法をあやまる事むへなり。色診の〔38〕身も盡・素を宗祖

とし、難・脉、羽翼としあつむへし。声音の学の事は呂【五十二オ】律の道、医家は云にをよはず楽官にも長せるものなし。されと、いさ、かその法の〔39〕残れるよしきゝをよひぬ。そのいさ、か残れる人にまなひて、心にそめ耳にふれなん理義をかかふるにいたりては、これも數年心させし事なり。律曆新書等をより所とし、経史のうち声律の説を抄出し、〔40〕ひつきやう医家の用となさん。脉学の事申尽しかたし。只末学の惑説にたつさわらざるをむねとすへきなり。問〔41〕証の【五十二ウ】一事も十五、六歳の時、先君子にしたかひて診治せしに、色診・律学のしりかたき事を愁ひ、是を專とし脉候に入せなんと常〔42〕に日記を懐にもたせり。其目錄。〔43〕一、歳之甲子。一〔44〕時の春秋。一日の支干。一方の南北。一人の〔45〕姓名。一年の齡。一形の肥瘦。一面の五色・潤枯・黑白。〔46〕一、問病来日數。一問病〔47〕由。一問飲食何物〔48〕有発熱乎、寒熱往来乎、何刻来何刻去、夜甚乎昼甚乎、惡風寒乎。一問有汗乎無乎、若有汗者又問自汗乎盜汗乎、服薬の汗乎、【五十三オ】頭上之汗乎。一問大道如常乎、結乎、若言結者問其日數、瀉乎、若言瀉者問其行數。一問水道如常乎、〔49〕黃乎赤乎白乎、短少乎數乎。一問咽喉渴乎口乾乎、燥不飲乎、喜熱湯乎喜冷水乎。一問食進平不進乎、五味好〔50〕惡如何。一問積之有無、若〔51〕言有積者問其所在。一問有頭痛乎、若言痛者問其〔52〕處。一問周身有痛〔53〕處乎。一問痰有平無乎、若言有痰者問其潤燥新久。一問手足冷熱。一問其人平素行事多酒多〔54〕慾性の緩急等。一問疾若多端の中何最勝。一婦人問月水之【五十三ウ】応期不応、与多少帶下、〔55〕孕与不孕乎。病家に入毎に如此問きはめて、先君子にまなひたてまつりしなり。今思へはまことにをろかなれと、又みたりなるにもあらねは、他日の張本となし、往解

作るへしと語り出侍るなり。第七死生決、第八虚邪八風等あつむへきしな、まなふへきさま、あまりにくたしければさしをき侍りぬ也。」

一問「靈樞・素問・難經・傷寒論・金匱祖方・脉経をこそ医家の経伝として学ふへけれ、【五十四才】老師大倉公か学を准拠となし、別に式目を立給ふはいかなる故そや。」答云「立る式目は実に靈・素・難・傷寒・金匱・脉経を聖まなふ也。それた、にまなふと、法をたて、学ふと、かはる也。内経を見給ひしや。巨海にのそむかことし。よりよる所をしらす。難經を見給ひしや。市肆に入かことし。見るものみな要なり。巨海をわたるには大船に乗すへし。今の式目一通成熟せは、巨海わたる大船にこそあらさらめ、磯辺をつたふ扁舟とは【五十四ウ】なりなん。市肆に入ん時、錦繡をもとむるよき価ほとこそあらさらめ、葛布をおきなふと、のへとはなるへし。あなかしこ、人にきかせし。人のき、なは、おほけなき心とのみはいはし。この比きつねやうのもの、たちそひけるにや、ものくるおしくすちなき事をの、しるとあはれかりなむもうたてあるへし。さて、傷寒論は見給ふや。三百九十七法一百二一、三方、一法、二方として、心のそことけ、これそよく領受したと思ふはすくなし。脉経を【五十五才】見給ふや。岐・黄・扁・華・仲景かことのみあつめたるにあらず。六経に礼記あるかことし。こなたに心得たる事なくてえらなは高陽生にこそあらめ。わか式目、其初人身の形体をきはむに経絡より毛髮までにおよほし、なかは天地をうか、ふに大歳大運より半時一刻までにいたり、終診治をまなふに四知より起居までをはかす。其間ことごとく病状治法を案すへしとす。かくありてのち、傷寒

論・金匱・脉経【五十五ウ】を見給へ。むかしよみけるわれと、おなしわれならんや。大概人の靈・素等をよみて心得給ふとあるは、内経は王氏・馬氏か注、難經は諸家の注、傷寒論は成無己か注を一わたり見給ひ、とをりぬるにや侍らん。もとより王・馬氏、成氏等見たる所なきにあらず。又よくつとめたり。いまにそのめくみをかうむりてこそ、句読をもわきまふる事には侍るなれと、よろつの注疏は本文の句にしたかひ章に應して解説【五十六才】するもの也。身みつから精察し、修行せんとおもは、条をたて法をさためて真実を得へき事也。近代、其式の大法をたてしものは滑伯仁なり。素問抄の類聚、十四経の發揮、難經の本義、診家の枢要、医按の書法等見たまふへし。」一問「王汝言かいはく、医の内経は儒の六経のことし。不備ところなし。張・李・逆劑・朱か書は学・庸・語・孟のことし。六経の階梯逆なりと。老師なにそこれにしたかはざる。」【五十六ウ】答曰「四家は誠に内経の要を得て天下後世医門の師とする人なり。然るに各逆義を發明し一家の法をたつ。其階前をわたりつくさんとせば、階前の花もみち逆ありかひ、さまなり。逆なかめたはふる、に日くれて、つるに堂室にはいらすやあらなん。階梯にあらすとはいはず。王汝言は明経の進士をへて、医家にも心をそめし人也。実に精をみかき、ちからをつくして、本経をまなひ給ひてのち、かくの給ふにや、【五十七才】又道理のかくあるへきこと、空にはかりての給ひしや、しらす。」

一問「扁鵲は李醜に刺殺せられ、華佗は曹操に誅戮せられ倉公は中人か所によりて獄囚にあふ。いづれもみな禍にかゝりしはいかなる故そや。」答「扁鵲は逆むさほれり。華佗はかたまし。倉公はほしいま、

なり。天下の絶才をもつてかくのときはあやうし。司馬氏かそねみうたかはるゝの評もさもあらん事なり。されは、此【五十七ウ】道は修してつゝしむ「逆物」は国をも医すへし。つゝしまさるものは、わさはいをかふ中たちとならん。又范文正公の宰相とならひ称せられしは、仁術のほとこしをおもんす。伎藝をいはす。韓文公の君子いやしむところといひしは、伎藝とするつたなきをそしれり。其道をいはす。学ひてやまは道ならねと、さもあらん。いにしへ「逆」に跡をかくせし人おほし。まなひすしておこ【五十八オ】なふはいやしといひては、やましおそろしき事なり。【五十八ウ】

《附録》

京都大学富士川文庫⑧の跋文

藪医問答上下篇、洛西並^ヒ岡ノ山人土佐ノ道寿翁之所^ス著^ス也此ノ翁^ト涉^リ四子之書^ニ潜^ニ發^シ素難之藹^ヲ深^ク探^リ運氣之奧^ヲ遂^ニ長^シ五味之變^ニ而後^ニ著^ス此^ニ二篇^ヲ立^ツ医学大小之序^ヲ其說雖^ト以^テ【五十九オ】和語^ヲ似^ト膚淺^ト然通^シ其意^ニ本^ニ其序^ニ而学^ハ、則^チ医学之大成豈外^ニ乎此^ニ哉^ト読^ル者其思^ヘ之^{【五十九ウ】}

杏雨書屋乾々齋文庫④の『藪門家医学學習』

藪門家医学學習 土佐道寿撰

諸技百工の輩といへど、師の伝をうけ学習成て後、其道を行ふにこそあなれ。近世の医工はいかなれば、学習することなく、方書のまゝに人の病を治すらん。抑百工の類は、仮令まなひす技藝つたなくとも害をなすまての事はあらし。医術あやまりぬれば、人の天年を奪ひ憂苦をあた

ふる事なれり。心あるものは是をうけさらんや。【二オ】

一或曰「吾子の其意ふかく、近代医業殊更に盛にして官医名師家門をならへ、大才広学の誉ある人多し。学徒竹葦のことく群集し、或は医典を談論し、或は儒教を講説す。上代にも越たりと見へたり。」答曰「其師をあかむる者、その道を伝へ教ふといふものをきかす。門弟に侍るもの、なにをうけまなふこといふこともなし。たゞに師弟の名のみありて、往来するなり。なにを以ていふとならば、老医にむかつてまことに薬品の気味・陰陽・功能の理をとひ見よ。陳皮・甘艸といふも答ること【一ウ】あたはし。治病の例をとひみよ。感冒・瀉利といふともしるへからず。製方の法をとひみよ。君臣佐使も弁ふへからず。腧穴按処をとひみよ。経絡藏府をわかつかへからず。診候の道、二十四形の名をおほへ、浮沈・遲数をさくるのみ。天運地利にいたりて、六氣五運をかそへ、其歳の災祥をいひ、南北の寒熱をわかつかはかりなり。ヶ様のたくひをなにつたへ、なにを習ふといはんや。医と称し性命をまかせんや。病家に入て問証診察の次第をしらねは、功言談笑して寸を握り尺を按して退き、医状【二オ】をたに記せず、思惟をいたすへき程智なければ、家々の抜書、万病回春などいふやうなる近代の方書を俄にくりひろけて、薬劑をとりあわせてつかはすとみへたり。しからは、日頃の学文は文字の上を解し、講説は説経師の辻談儀の類ひなるへし。とにかくに利をもとめ、名たてんとなり。」

一それがし箕裘の家を継ながら、俗流と同じさまならん事をはちおそれて、業をやめて草菜のあひたにかくれたりし。しつかにその道を修せんとするに、妻子の飢寒【二ウ】をふせきかたし。社友をむすはんと

するに資糧にともしくて、心さしをとけすなりぬへきなり。

一或曰「若本意のことく修行せば、其学の次第いかゝすへきそや。」答曰「某嘗て藪医問答一卷をあらはせり。其次第に

○入学誓戒○未^レ得師之許可^一者不^レ可^二為^レ人治^一病字不可躡等可下学而上達○不可攻異端四書五経門可講

一第一究藥品氣味陰陽功能之理 凡三百餘種

一第二諳諸病の治例 凡五十門許【三才】

一第三弁製方本旨 凡三百首

一第四參^二古医案^一 凡五百条許

一第五診法口決

一第六鍼灸穴法 分経絡訂治理 凡百餘所

一第七講究之書

右下学之次第也 旨趣藪医問答

一第一経十二奇八 穴法終始主病 治法は鍼灸薬

一第二榮衛脩行 度数主治 治法鍼灸薬

一第三四筋骨皮部 血絡分肉九竅分尺所主病形治法鍼灸薬

一第五臟腑形象 所在所属 治法鍼灸薬

一第六氣運常氣變氣病機 治法鍼灸薬【三ウ】

一第七望聞問切

一第八生死決

一第九八風虚邪 四時所傷 勞倦飲食 色欲諸証 諸治鍼灸薬

右上達之学次第也。詳に見藪医問答。蓋準擬大倉公之古医習例。

【四才】

注

- [1] ① ミセケチ「しりとるしりとるしれもの」
- [2] ① ② 「見つけたらは」
- [3] ① ミセケチ「心を露をき」
- [4] ① 脱字
- [5] ① 脱字
- [6] ① 脱字
- [7] ① 「せめらるとも」
- [8] ① ② 「吾国」
- [9] ① 「なれは」
- [10] ① 「かくは」
- [11] ① 脱字
- [12] ① 脱字
- [13] ① 「世の人」
- [14] ① ② 「者」
- [15] ① ② 「生れたる」 ③ 「むまこたる」
- [16] ① 「送りて」
- [17] ① 「薬」
- [18] ① ② 「生れ子」
- [19] ① 「彼の世渡」
- [20] ① 「わすろふ」
- [21] ① 「よみおほへて」
- [22] ① 「へ」 ② 「わ」
- [23] ① 「もの」 ② 「者」 ③ 「わ」
- [24] ① 「五人か十人」
- [25] ① 「し、こ、らかし」 ② 「じ、ころし」
- [26] ① 「へけれ共」 ② 「へけれとも」
- [27] ① 脱字
- [28] ① 脱字
- [29] ① 脱字
- [30] ① 「四書注疏」

- [31] ㉞ 「おほへたり」
 [32] ㉞ 「道巻」
 [33] ㉞ 「のそみしの」
 [34] ㉞ 「医書家」
 [35] ㉞ 「よりて」
 [36] ㉞ 「とも」
 [37] ㉞ 「こゝろさし」 ㉞ 「心さし」 ㉞ 「心さしぬる」
 [38] ㉞ 「脱字」
 [39] ㉞ 「正常」
 [40] ㉞ 「それかしは」
 [41] ㉞ 「る」
 [42] ㉞ 「慈心」
 [43] ㉞ 「は」
 [44] ㉞ 「ほめられん」
 [45] ㉞ 「か」
 [46] ㉞ 「脱字」
 [47] ㉞ 「よし」 ㉞ 「あしく」
 [48] ㉞ 「かれををし」
 [49] ㉞ 「脱字」
 [50] ㉞ 「脱字」
 [51] ㉞ 「脱字」
 [52] ㉞ 「俸禄」
 [53] ㉞ 「心を心にも」
 [54] ㉞ 「はつかしうこそ思ひ」
 [55] ㉞ 「には」
 [56] ㉞ 「能心得」
 [57] ㉞ 「ゐたり」
 [58] ㉞ 「たゞ物」
 [59] ㉞ 「脱字」
 [60] ㉞ 「字の傍に「嵯峨ニ住ス」
 [61] ㉞ 「頭注「医小学ト云書一冊作セリ」、㉞ 「割注「外ニ一冊アリト見ユ」
 [62] ㉞ 「脱字」
- [63] ㉞ 「頼むところ」
 [64] ㉞ 「あり」
 [65] ㉞ 「脱字「治病の法」以下、㉞ 「脱字「学問と」から「条下」まで
 [66] ㉞ 「脉実数」
 [67] ㉞ 「峻」
 [68] ㉞ 「脱字」
 [69] ㉞ 「註」 ㉞ 「経」
 [70] ㉞ 「名医」
 [71] ㉞ 「脱字」
 [72] ㉞ 「脱字」
 [73] ㉞ 「源頼光」
 [74] ㉞ 「金石」
 [75] ㉞ 「禽獸」
 [76] ㉞ 「土金水の氣をかねざるあり。土金水の氣をうけて木火」
 [77] ㉞ 「脱字、㉞ 「香焦腥臊腐」
 [78] ㉞ 「脱字」
 [79] ㉞ 「黄帝神農」
 [80] ㉞ 「お」
 [81] ㉞ 「て」
 [82] ㉞ 「故に」
 [83] ㉞ 「脱字」
 [84] ㉞ 「よく」
 [85] ㉞ 「脱字」
 [86] ㉞ 「脱字」
 [87] ㉞ 「八陳」
 [88] ㉞ 「北剂」
 [89] ㉞ 「脱字」
 [90] ㉞ 「徐之才」
 [91] ㉞ 「病症」
 [92] ㉞ 「脱字」
 [93] ㉞ 「なくて」
 [94] ㉞ 「程氏」

- [95] ㊦ ㊦ 「儀」
 [96] ㊦ ㊦ 「事」
 [97] ㊦ 「虚病に補薬」
 [98] ㊦ 「臣」
 [99] ㊦ 「饗」
 [100] ㊦ 「反逆」
 [101] ㊦ 「斗」
 [102] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [103] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [104] ㊦ ㊦ 「みて」
 [105] ㊦ ㊦ 「我才」
 [106] ㊦ 「我方」 ㊦ 「我才」
 [107] ㊦ ㊦ 「治療を見る」
 [108] ㊦ 「古」
 [109] ㊦ ㊦ 「痰症」
 [110] ㊦ 「あとふ」
 [111] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [112] ㊦ 「案参校」
 [113] ㊦ ㊦ 「諸名家」
 [114] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [115] ㊦ 「所をしらさらん」
 [116] ㊦ ㊦ 「病症」
 [117] ㊦ 「請する」
 [118] ㊦ 「製法」
 [119] ㊦ ㊦ 「病症」
 [120] ㊦ 「斗」 ㊦ ㊦ 「鬪字、傍に「不許」
 [121] ㊦ 「証」 ㊦ 「有」
 [122] ㊦ 「推量」
 [123] ㊦ 「方」
 [124] ㊦ ㊦ 「から▲まで脱字」
 [125] ㊦ 「身みつから」
 [126] ㊦ 「其法古法古医状の務式」
 [127] ㊦ 「察」
 [128] ㊦ ㊦ 「へし」
 [129] ㊦ ㊦ 「五菜」 ㊦ 「五菜」
 [130] ㊦ 「菜」
 [131] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [132] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [133] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [134] ㊦ 「死生凶決する」
 [135] ㊦ ㊦ 「万物榮衰」
 [136] ㊦ 「鬼神を变化を」
 [137] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [138] ㊦ 「度」
 [139] ㊦ ㊦ 「神機存亡」
 [140] ㊦ 「吸に脉」
 [141] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [142] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [143] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [144] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [145] ㊦ 「三部は心肝腎」
 [146] ㊦ 「六部」 ㊦ 「六腑」
 [147] ㊦ ㊦ 「託せる」
 [148] ㊦ 「覚ゆるは」 ㊦ 「思へるそは」
 [149] ㊦ 「偶なる説あり」
 [150] ㊦ ㊦ 「華佗」
 [151] ㊦ 「くたしけれと」
 [152] ㊦ 「右尺」
 [153] ㊦ 「脾土に」
 [154] ㊦ 「剋す」
 [155] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [156] ㊦ ㊦ 「中央」
 [157] ㊦ ㊦ 「にて」
 [158] ㊦ 「国主」

- [159] ㊦ ㊦ 「古」
 [160] ㊦ ㊦ 「つたねて」
 [161] ㊦ 「裁同父」
 [162] ㊦ 「にし」
 [163] ㊦ 「第十四」
 [164] ㊦ 「臓」
 [165] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [166] ㊦ 「問にては」
 [167] ㊦ 「右」
 [168] ㊦ 「の」
 [169] ㊦ 「我腎」
 [170] ㊦ 「膀胱は」 ㊦ 「膀胱」
 [171] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [172] ㊦ ㊦ 「仮託す」 ㊦ 「仮佐」
 [173] ㊦ 「たれも」
 [174] ㊦ 「肉の上」
 [175] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [176] ㊦ 「者」
 [177] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [178] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [179] ㊦ 「反関怪平生異」
 [180] ㊦ 「平生解了」
 [181] ㊦ 「条」
 [182] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [183] ㊦ 「諸穴は流注にして」 ㊦ 「諸穴は血気の流注し」 ㊦ 「諸穴益気の流注し」
 [184] ㊦ 「料」
 [185] ㊦ 「あらずや」
 [186] ㊦ 「難知経」
 [187] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [188] ㊦ 「治方」
 [189] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [190] ㊦ 「もと」
- [191] ㊦ ㊦ 「式」
 [192] ㊦ ㊦ 「他」
 [193] ㊦ 「条学」
 [194] ㊦ 「それかし」
 [195] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [196] ㊦ ミセケチ 「けにけに」
 [197] ㊦ 「あたる」
 [198] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [199] ㊦ ㊦ 「群書」
 [200] ㊦ 「まことに」
 [201] ㊦ 「忘意」
 [202] ㊦ 「をば」
 [203] ㊦ 「忘意」
 [204] ㊦ 「よろしき」
 [205] ㊦ 「連歌」
 [206] ㊦ 「見給ひたるは」
 [207] ㊦ 「それく」
 [208] ㊦ 「連歌」
 [209] ㊦ 「こそ」
 [210] ㊦ 「大形」
 [211] ㊦ 「待るに」
 [212] ㊦ 「さほとならん」
 [213] ㊦ 「所いさまで」
 [214] ㊦ ㊦ 「医方」
 [215] ㊦ ▼から▲まで脱字
 [216] ㊦ 「かちめ」
 [217] ㊦ 「なり」
 [218] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [219] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [220] ㊦ ㊦ 「脱字」
 [221] ㊦ 「今又」 ㊦ ㊦ 「脱字」
 [222] ㊦ 「一む月」

- 〔223〕 ㊦ 脱字
 〔224〕 ㊦ 「おこと」
 〔225〕 ㊦ 脱字
 〔226〕 ㊦ ▼から▲まで脱字
 〔227〕 ㊦ 脱字
 〔228〕 ㊦ 「答云」
 〔229〕 ㊦ 「扁鵲」
 〔230〕 ㊦ 脱字
 〔231〕 ㊦ 「名神論」
 〔232〕 ㊦ 脱字
 〔233〕 ㊦ 「内」
 〔234〕 ㊦ 「在」
 〔235〕 ㊦ 「往昔」
 〔236〕 ㊦ ㊦ 「儀」
 〔237〕 ㊦ 「さためん」
 〔238〕 ㊦ 「穴法終始を」
 〔239〕 ㊦ 「かさね」
 〔240〕 ㊦ 「とせず」
 〔241〕 ㊦ 脱字
 〔242〕 ㊦ 「営」
 〔243〕 ㊦ 脱字
 〔244〕 ㊦ 「臟腑」
 〔245〕 ㊦ 「第七」
 〔246〕 ㊦ 「営」
 〔247〕 ㊦ 脱字
 〔248〕 ㊦ ㊦ 「事」
 〔249〕 ㊦ 「平生学文」
 〔250〕 ㊦ ㊦ 「事」
 〔251〕 ㊦ 「たとひ」
 〔252〕 ㊦ 脱字
 〔253〕 ㊦ 「その外に」
 〔254〕 ㊦ 「人はいづれか」
 〔255〕 ㊦ 「儀倫」
 〔256〕 ㊦ ㊦ 「汪石山」
 〔257〕 ㊦ ㊦ 「簡略」
 〔258〕 ㊦ 「いへ共」 ㊦ 「いへとも」
 〔259〕 ㊦ 「五相」
 〔260〕 ㊦ 「達ぬ」
 〔261〕 ㊦ 「揚本受」
 〔262〕 ㊦ 脱字
 〔263〕 ㊦ 脱字
 〔264〕 ㊦ 「みあきらめなる」 ㊦ 「みあきらかなる」
 〔265〕 ㊦ 「なし」
 〔266〕 ㊦ ㊦ 「なき」
 〔267〕 ㊦ 「第六望聞問切」
 〔268〕 ㊦ 脱字
 〔269〕 ㊦ 「所を」
 〔270〕 ㊦ 脱字
 〔271〕 ㊦ ㊦ 「事」
 〔272〕 ㊦ 脱字
 〔273〕 ㊦ 「畢竟医学」
 〔274〕 ㊦ 「症」
 〔275〕 ㊦ ㊦ 脱字
 〔276〕 ㊦ ㊦ 「一歳」 ㊦ 「三歳」
 〔277〕 ㊦ 脱字
 〔278〕 ㊦ ㊦ 「姓名」
 〔279〕 ㊦ 「一問の病」
 〔280〕 ㊦ 「甲」
 〔281〕 ㊦ ㊦ 「一問」
 〔282〕 ㊦ 「赤黄白乎」
 〔283〕 ㊦ 「五味如何」、㊦ 「五味好要如何」
 〔284〕 ㊦ ㊦ 脱字
 〔285〕 ㊦ ㊦ 「所」
 〔286〕 ㊦ ㊦ 「所」

- 287 〔A〕〔B〕「欲」
 288 〔B〕「乎」
 289 〔A〕〔B〕「準拠」
 290 〔A〕〔B〕「答曰」
 291 〔A〕〔B〕「今立」
 292 〔A〕「まなふとかなる」
 293 〔A〕〔B〕「脱字」
 294 〔B〕「威」
 295 〔B〕「十」
 296 〔B〕「三法」
 297 〔B〕「脱字」
 298 〔A〕「えらなは」〔A〕〔B〕「えらひなは」
 299 〔B〕「高陽子」
 300 〔A〕〔B〕「おもほし」
 301 〔A〕〔B〕「劉」
 302 〔A〕〔B〕「たり」
 303 〔B〕「一儀」
 304 〔A〕〔B〕「ちりかひ」〔B〕「ちるかど」
 305 〔B〕「なかめたは至るゝ」〔B〕「なゝめたはふるゝ」
 306 〔B〕「むゝなれり」
 307 〔B〕〔B〕「者」
 308 〔B〕「も」